

# ユニテ

2013. 4

40



一般財団法人  
ロマン・ロラン研究所

表紙 ロマン・ロランと賀川豊彦  
(賀川の写真は提供：賀川豊彦記念・松沢資料館)

〈ロランと賀川を合わせ鏡にすれば興味がつきない精神世界の万華鏡  
が浮かび上がる。そこからは、汲めどもつきない精神の泉が流れ出る〉

(濱田 陽、本誌16ページ)

## 目次

ロマン・ロランと賀川豊彦——戦いを超えて・死線を越えて	濱田陽	1
「ロマン・ロランと賀川豊彦」講演会の感想	奥村一彦	24
ロマン・ロラン		
『ヴェズレー日記 一九三八—一九四四年』について	村上光彦	26
ロマン・ロラン研究に新たな息吹き	シツシユ 由紀子	38
設立者 宮本正清 没後三〇年によせて		
「鐘を聴け」 宮本正清先生の詩と歌曲	西垣正信	42
いただいたフランス語の手紙	井土真杉	46

第三回 ロマン・ロラン国際シンポジウム参加報告

「日本におけるロマン・ロランの音楽」

——音楽劇<sup>オペラ</sup> 今藤政太郎作『ピエールとリュース』

..... 宮本 エイ子 ..... 48

再びヴェズレーへ

..... 中田 裕子 ..... 54

白い大きな手

..... 西尾 順子 ..... 56

ロマン・ロラン研究所便り

ロマン・ロラン研究所の一般財団法人化について

..... 西成 勝好 ..... 59

研究所設立趣意書

..... 60

研究所の活動

..... 61

寄贈図書、訃報

..... 68

短信、読書会例会報告

..... 69

二〇一二年度 賛助会員、寄付者名簿

..... 70

編集後記

..... 71

## ロマン・ロランと賀川豊彦

— 戦いを超えて・死線を越えて

濱田 陽

現在と未来の日本に生きる人々にとってロマン・ロランの存在意義とは何か。それを、日本初のノーベル文学賞・平和賞候補者、賀川豊彦との比較によって見出したい。

平和主義、反ファシズムの作家であるロランと社会的起業家、作家である賀川豊彦を合わせ鏡にすることで、「自由」とキリスト教兄弟愛という二つの心的世界に、響き合い、すなわち「レゾナンス」〔共振〕(resonance)を見出し、ロランの自由を蘇生させる。この試みにより、支えてくれるものでなく、よりかかるものでなく、私たち自身が守り育てるものとして、ロランの人と作品を私たちの手のもとに取り戻したい。

### 一 ロランの自由

ロランの自由は、彼のいう「大洋感情」に立脚している。それは、心的世界の情景として汎神論はんしんろんである。すべてのものに神的なものが宿る。見えないが、そういう「存在」の世界が大洋のように広がっており、自分の精神もその一部であるという情景。自分の精神は家族、友人、祖国等々から独立してはいるが、同じ存在の世界とつながっている精神の友を求めて呼びかけていく。

他方、キリスト教兄弟愛は、不完全で過ちを犯してしまう弱い人間に寄り添ってくれる救い主の存在が基礎にある。神が人となり、過ち多き人間のためにその過誤をわが身に受けて償い、いったん死にながらなお死の世界から復活し、永遠のいのちとなって、神の霊を一人ひとりにふきこんでくれる。そういう救い主イエスに励まされ、その生き方にならって人を愛そうという心の変容が生じてくる。

ロランは青少年期にカトリック信仰、つまり、キリスト教兄弟愛の源泉につながる心の扉を失ってから、心情と理性によって大洋感情を見出し、生涯それを保ちつづけた。そして、これから述べるように、その大洋感情への信頼が、彼のメッセージに前例のない成功と泥にまみれるほどの挫折の両方をもたらしたのである。

ロランは、大洋感情に立脚して、『ベートーヴェンの生涯』（一九〇三）、『ジャン・クリストフ』（一九〇四—一九二二）を世に送り出し、「戦いを超えて」（二九一四）、「精神の独立宣言」（二九〇九）のメッセージを發した。フランス人でありながらベートーヴェンを思わせるドイツ人音楽家クリストフを主人公にした大河小説を造型し、フランス人の親友オリヴィエを登場させ、クリストフに宿った自由な魂が、ヨーロッパの自然と芸術から養分を得ながら抑圧的な境遇と時勢に抗して成長していき、やがて見えない存在の大洋へと合流するパノラマを描き切った。彼がまるで音楽のように感性に訴えかける大河小説を生み出すことができた秘密は、言葉と音楽を共感的に受けとめる、大洋感情につながる精神を詳しく会得できたところにある。

それがロランの長所であり弱点でもある。

第一次世界大戦が勃発したとき、ロランは当時のインテリとしては稀有な明瞭さで精神の独立と自由の尊さを、全ヨーロッパに向けて訴えることができた。それが「戦いを超えて」というエッセーである。彼にとつて、大戦は『ジャン・クリストフ』で自らが造型した世界の否定でもあった。

このロランのエッセーは、残念ながら、不朽の価値をもつ。人類が初めて経験した世界大戦の始まりと終結におい

て、もつとも明瞭な精神性擁護のメッセージであるからだ。彼は、青年、支配者、聖職者、そして何より芸術から科学まで精神の仕事に携わる知識人に広汎に呼びかけ、帝国主義を糾弾している。つまり、西洋近代文明が生み落とし、世界に拡散したグローバル資本主義の行き着く矛盾、生き残り・貪欲としての資源・土地・市場の獲得競争がこの大戦の底流にあり、その矛盾の根本的解決が現代にいたるまで達成されていないからだ。だから、ロランの忘却は、人類初の世界大戦の只中に稀有な声として発せられた精神的達成の忘却である。

しかし、ここで私たちは過ちを犯し、あるいは、誤解してしまう。

ロランの説いた精神の独立や自由、何よりも、ロラン自身は、それに支えられるよりも、むしろ、私たちの方から、守り、育てて行かなければならないものであるからだ。ロランの未発表日記・資料を駆使した伝記『あるがままのロマン・ロラン』（ベルナル・デュシャトレ著、アルバン・ミシエル、二〇〇二）と、その邦訳『ロマン・ロラン伝 一八六六―一九四四』（村上光彦訳、みすず書房、二〇一一）が刊行され、今日そのことがいっそう明らかに見えるようになってきた。

ロランの自由は、それに私たちが支えられるものでなく、私たちが守り、育てるもの。これが、ロランについて私がか主張したい一番のテーゼであり、近現代から未来へつながるロランの価値であると考ええる。ロランに対する接し方を一八〇度転換したいのだ。そうすれば、ロランの意義は、広い層により明瞭に受けとめられるようになり、正当な評価が与えられ、豊かな種を、これから求めるべき新たな文明世界に提供してくれるようになるだろう。

当時、彼のメッセージを共感をもつて受け取った人々の多くは、彼をアルプス山脈のように仰ぎ見て、よりかかろうとしてしまい、ロラン自身もそういう「幼い」精神の導き手になろうと、たゆまぬ努力、心の漂泊を重ねていった。その帰結はどうであったか。知的良心の導き手たらんとして、友たる民衆のもつとも新たに大きな器と彼が考え、逡巡を重ねて希望を託した共産主義ソビエト連邦政府の罠にからみとられた。そして、晩年のロラン自身が自分の誤

謬と徒勞を認め、無力感にまみれることになった。スターリンは、体制維持に手段を選ばない本性をしだいに露わにし、無数の人々を肅清し、ロランがもつとも対抗しようとしたファシズムとさえ手を結んで一九三九年には独ソ不可侵条約を締結して帝国主義的ふるまいに出、それが直後のヒットラーのポーランド侵攻、第二次世界大戦へと直結していつてしまった。根強い帝国主義とファシズム台頭による大戦の再発を恐れていたロランは、人民の共産主義革命を擁護し、これをヨーロッパにおいて育成してファシズムに抗することを考えたのだが、ソ連で起きている社会実験の行き着く先が、フランス革命をはるかに凌駕する犠牲を生むことを見通せなかった。歴史家、劇作家としてフランス革命を知悉していたロランの想像力を上回る悲劇が現出してしまったのである。この二〇世紀の悲劇を、真摯な知的道化役者のように生きてしまったロラン。

しかし、このことをもって、ロランの存在を全否定し、忘却してしまう態度は、ヨーロッパの良心としての彼のイメージのみを思い浮かべ、ただ支えられようとする態度とともに、もう古いものになってしまっている。

たしかに今日の現状はロランの忘却である。「戦いを超えて」を著した一九一五年度、スウェーデンよりノーベル文学賞を受賞したロランであるが、『ジャン・クリストフ』とともにその名前すら、日本の大学生たちにほとんど知られていない。

だが、繰り返すが、ロランの名と彼が一時期体現し得た精神の独立および自由は、こちらから守るべきものとして、新たに見出し、育てていくべきものだ。

意外に思われるかもしれない。

もともと、日本では、ヨーロッパの学芸と文化への憧れが、ロランのような文学者への憧れにもつながっていた。ロランの知的ネットワークにはベートーヴェン研究から物理学者アインシュタインとの交流まで眩いばかりの光明があるように見え、じつさい、それはあったのだ。しかし、憧れを越えてロランに接近していくなら、圧倒的な彼我が

格差と現実が立ち現れてくる。片や同時代のヨーロッパを代表する知識人であり、世界的名声を得たノーベル賞作家、一方、現代の日本人は、大衆社会に生きており、ロランのような作品を生み出すことはおろか、誇るに値する仕事ができているかと自問すると、口を閉ざす他ないようにも感じられてしまう。

しかし、立派に見えるものがじつは弱いものであり、立派でないものが思いがけない強さを發揮し、それを守るという逆説があるのではないだろうか。それに気づくことが、ロランから隔たらない、ロランを見捨てない道であり、私たちが手放してはいけない道ではないだろうか。

象徴的なエピソードがある。彼自身が語っていることだ。

五歳のとき、父母と妹と四人家族だったロランは、ポルドー・アルカシヨンの海水浴場に遊びに来ていた。一歳にもならないとき、家事見習いの娘の不注意で、雪の積もったバルコニーに置き去りにされてしまい、一生毛細気管支炎の後遺症を背負う身となったロランは、日頃、自分はやせてひ弱だと感じていた。浜辺で遊んでいて、ほかの子供たちから仲間はずれにされ、泣きべそをかきながら妹の足もとにもどつてくると、二歳下だった幼い妹が、自分の髪を優しく撫でて、なぐさめてくれた。ところが、翌日、妹は咽頭ジフテリアにかかり、六時間の苦しみのすえに息をつまらせ亡くなってしまった。ロランの母はその哀しみを一生、心に刻印し、幼い娘への思いを持ち続けた。ロランが、精神が溶け込む広い大洋感情を見出すにいたったのには、妹の死の経験が、大きな影響を与えていたのだ。

重要なのは、幼い自分よりもさらに幼い、髪を撫でてくれた妹、明日急死することになる妹が示してくれた優しさである。推測であるが、これが、ロランが第一次世界大戦の渦中においてさえ達成できた自由と精神の独立を、見えないところで支える力の、根源的パターンではないだろうか。

ロランは、自分が独力で戦い、自由を勝ち取り、精神の独立を達成し、それによって、多くの幼い友の導き手たらんと責任を感じつつける。しかし、じつのところ、その同じ営為は逆の側面ももっていた。彼の精神を支え、生涯の

こころの糧となるピアノ教育を与えたのは母であり、ロランの教育のために一家でクラムシーからパリに移住するという妻の主張を受け入れ、住み慣れた田舎を離れ、出世につながらない地味な不動産銀行での仕事に従事して、学資と家計を支えたのは父であった。この母と父の献身的な支えなくして、知的エリート<sup>エリート</sup>の道を行くロランの栄達はありえない。たしかに彼は、音楽を愛しながらも、家族の期待に応える義務のために最初から芸術家の道に進めず、大学教員の道を進まねばならなかった。作家として世に認められるまで、二足のわらじで涙ぐましい研鑽を重ねた。しかし、それはやはり恵まれた道である。彼にとって芸術や文学は、その担い手とじかに触れ合うことができる、生きる人間の営みとして味わうことができた。ワーグナーやニーチェの友人だったマルヴィーダ女史のような生き証人がツァルト、ベートーヴェン、ゲーテ、トルストイなどヨーロッパの学芸に憧れる者なら、うらやましいかぎりだ。しかし、誠実に、彼はヨーロッパにおいて体現するような人間像を『ジャン・クリストフ』として造型し、「戦いを超えて」のメッセーヂを発するところまで研鑽を続けた。

これがロランの価値である。ヨーロッパを支配しつつあった反動的で退廃的な時代精神に埋没してしまうのではなく、精神の戦いを続け、自由に到達するところまで自己を高めていった。ただ、そういう彼は、同時に、大洋感情をもった人間の、本質的な心の作用として、たえまなく「友」を求めつづけていくことにもなった。精神は独立しているながら、同じ大洋につながっている友を求めずにはいられない。魂の遍歴を重ねずにはいられないのである。

高等師範学校時代の親友シユアレスや、恋愛結婚し、性格の不一致によって袂を分かつたユダヤ人の知識階層出身のクロチルド、長い人生にわたる女友だちとなったイタリア貴族の娘ソフィアをはじめ、彼の友を求めるパッションは尋常でない多様性と広がりをもっている。

孤高に見えながら、どこまでも友を求めてしまいうロラン。

彼は、大洋感情と精神の独立の世界に、その友を導きたいというパッションをもっている。この心的傾向がヨーロッパのみならず、アメリカ、インド、日本など世界中の読者に呼びかけ、また、その応答をもらうことができた、彼の人間性の内奥の重要な要素をなしている。ロランが高潔だから、世界にメッセージを発信できたという単純な話ではない。彼は友を求めざるをえないのだ。友を支えようとしながら、じつは自らが支えられる必要があるのだ。

とくに老若、幅広い女性の精神に支えてもらう必要がある人だということが、ロランの人生からわかる。母はもちろん、年の離れたマルヴェイダ、ソフィア、カトリック信者ジャンヌ・モルティエ、ベルギー貴族の若いオルガ、アメリカ人の新進女優で「戦いを超えて」の時代に恋愛の火を灯してくれた若いサリー（タリー）。そして、母の死後、彼の仕事を支えた二人目の妹マドレーヌ。三〇歳の年の差があり、ロランの秘書となり、のちに夫人となったロシア貴族の未亡人マリー。もちろん、彼の大洋感情はトルストイ、アインシュタイン、タゴール、ガンディー、ヘルマン・ヘッセ、シュバイツァー、フロイトなど数多くの同性の芸術家、作家、学者たちとの邂逅を生み出した。しかし、彼には、心のそばにいてくれる女性の魂が不可欠だったように見える。ロランの感情は複雑で、結局、彼と結ばれる願いがかなわず同年代の男性の子を身ごもったサリーと再会するなどして世話をやいたりもしており、そうしたすべての経験が、女性を主人公にした長編小説『魅せられた魂』を生む。彼の大洋感情の世界において女性を伴侶、道連れにしようとし、彼と同時代の激動の社会のなかで、自由なる女性を造型しようとしたのだ。

ロランがマリーを後半生の道連れとした事情は複雑であるが、彼の大洋感情の必然的帰結でもあるだろう。

革命が勃発したロシアの民衆に彼は友を感じた。そのロシアから自分に精神の導き手を求めて近づいてきた若い女性。しかも、伯爵であった夫は亡くなり、息子セルゲイ（セルジュ）を育てながら新しい社会の実現を夢見ている。友たるロシアの民衆にマリーを重ねたのか、マリーが友の印象を形作るのに影響があったのか、彼は、革命ロシアに宿命的に結びついてしまう。

友たる民衆への心からの同情に、心のそばなる女性を求めぬ気持ち、そして、若い女性への恋愛感情が複雑に絡み合い、ロランはマリーとともにソ連の社会実験へと関係を深めていく。彼はサリーやマリーを「指導」したように、新生ソ連を導こうとする。革命の行き過ぎを戒め、論しつつ、帝国主義に抗してソ連擁護の論陣を張っていく。

しかし、彼は、自身の女友だちに満ち足りた幸福を与えることができなかつたのと同様、ソ連を制御し、導くことはできなかつた。ソフィア、サリー、オルガとは精神が親しすぎる友だちとして距離を保とうとし、マリーとは伴侶となるも、ソ連の社会実験の夢がついえた後の彼女の深刻な精神不安を支える力は、彼にはなかつた。ロランの晩年、マリーを支えていくのは、旧友のカトリック作家クローデルらがきっかけで彼女が入信したカトリック信仰になつたからだ。

また、スターリン体制の罪をつぶさに知り得たとき、ソ連にマリー夫人の息子と母を残していたロランは、友人の作家ゴリキー暗殺など数々の粛清を、第一次世界大戦で「戦いを超えて」を著したように、断罪することができなかつた。ロランが完全に自らの失敗を自覚した独ソ不可侵条約の二年後、一九四一年にセルゲイは戦死しているが、それをマリーが知るのは後のことである。ロランがその事実を知つたかどうかは『あるがままのロマン・ロラン』には記されていない。

最晩年のロランは、政治的・社会的闘争から離れ、縮言すれば、ベートーヴェン研究と福音書のイエスに同時に向き合いつづけることになる。ベートーヴェン研究は大洋感情の心的作用に属している。しかし、そこに福音書にあらわれた救い主イエスへの思いが加わるようになったことが新しい出来事だつた。ロランは、ソ連の導き手たらんとした自身の失敗を正面から見据え、さらには肉体の衰えと病状の悪化を経験するなかで、自分が拠り所としてきた大洋感情がそれだけでは支えにならないことを実感し、過ちを犯す人間への洞察に向かい、弱い人間に寄り添い、力づける人格をもつた神という、福音書が示す思想の価値を認めるようになった。

もちろん、彼は、理性の推論によっては証明されず信じることによって認めなければ体得しえないといわれる神の子イエスの存在を受け入れてカトリックに入信することは、最後までしなかつた。しかし、クローデルや若い世代の神父たちとイエスをめぐる対話をつづけ、妻や自身の病の快癒や精神の求めのために他者に祈られることに満足を覚え、信仰をもつ人々の精神の共同体の価値を認めた。そして、カトリックの妻とともに、自身の故郷クラムシーから一〇キロの小村ブレーヴの墓地に埋葬されることを願ったのである。

こうして、ロランが行き着いた精神世界の情景に近づくためには、大洋感情とキリスト教兄弟愛の響き合い、レゾナンス（共振）の理解が必要となる。しかし、ほとんどの日本人、とりわけロランの読者には、大洋感情の方は理解しやすくとも、キリスト教兄弟愛のほうは疎遠である。日本はヨーロッパのような分厚いキリスト教の文化伝統を有しない。他方、ロランは、精神には救い主イエスがもたらしてくれるような安心と同型の支えが必要であることを最晩年に洞察するようになった。自由と精神の独立には何らかの支えがいることを認めるにいたったのだ。

自由は、支えてくれるものではなく、守られなければならない、支えてもらわなければならないもの。ロランはそれをようやく自覚した。おそらく、彼の内奥のさらに深い感情に、この認識はつながっている。死ぬことになる前日に兄の髪を優しく撫でてくれた、幼い妹のような存在への感情に……。

では、現代の日本に生きる私たちは、いかにして、ロランが一次的にせよ達成した自由と精神の独立を継承することができらるだろうか。自由を守るということは、自分を含む、もっと弱いものにも、その自由と精神の独立を認めつつ、それでいて、それを支える何かとの響き合い、レゾナンス（共振）をロランのように見出していく、ということではないだろうか。

これは、今日の文脈でいえば、自由なディーセント・ワーク——品格ある、プライドをもった労働——の芽生えを、世界中の七〇億人口それぞれに、とくにBOP (Base of the Pyramid) と呼ばれる人々に認めていくこと、その上で、

自由な独立した精神をそのままで見守り、響き合いを生むことのできるような、たしかな文化伝統にもとづく精神的資源でもって、応援し合うことにもつながるのではないだろうか。

## 二 賀川の協同

私たちは日本に住んでいる。日本には、ロランが晩年にマリーとともに身を寄せることができたようなキリスト教の分厚い文化伝統はない。ヴェズレーの大聖堂もない。しかし、ロランの生涯のリアリティを知った上で、日本および東アジアの地で、——東アジアと記すのは、ロランがフランスというよりはヨーロッパに属しているキャラクターであるから、——その自由のメッセージの価値を守るために、そして、あえていえば守ってあげるためには、ヨーロッパにおけるロランと合わせ鏡のように照らし合わせることで、近代日本の「精神的等価者」が必要になる。それを見つけることで、私たちは、ヨーロッパとロランを見るだけでなく、ヨーロッパとロランから見られることが可能になる。そうして初めて、わが身を省みることができるようになるだろう。

ロランの故国フランスであるいはヨーロッパで、ロランが顧みられてほしいと願う場合、私たちは、どのような精神的営為をフランスとヨーロッパの人々に要求していることになるだろうか。「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」(ヨハネによる福音書第四章・四四節)ということを悟り、ロランを守る道を見出すためには、生前、世界的名声を博し、没後、自国で顧みられなくなり、その声の継承が困難になるということがいかなることかを、日本の地において理解することが必要ではないだろうか。

ロランと同時代に生きた、日本における精神的等価者を探すと、私は、それは賀川豊彦(一八八八—一九七〇)ではないかと考えている。

ロランが二二歳年長だけれども、二人とも帝国主義の脅威、二度の大戦、世界恐慌を経験した。

賀川は、今日の言葉でいえば、社会的起業家であり、作家である。彼の自伝的小説『死線を越えて』は、『ジャン・クリストフ』が完結した八年後、「戦いを超えて」の五年後の一九二〇年に世に出、上中下巻合わせて四〇〇万部を売り上げる大正時代最大のベストセラーとなった。これがいかに事件であったかは、当時の日本の人口規模が四千万人と現在の三分の一ほどで、今日でいえば一千万部以上が売れ一〇人に一人が手にした計算になることを思えば、容易に体感できる。

なによりも賀川が発するメッセージは、ロランの「自由」と精神の独立を呼びかけたメッセージと同じく世界的に注目された。賀川はロランの存在を知っていたが、ロランもスイスやドイツの雑誌で賀川の内容を知り、関心をもつにいたっている。

賀川豊彦はグローバル化していく資本主義の矛盾を一身に受けて幼少期、青年期を送った人だ。没落した家の娘で芸者になり、見初められた実母、父とも、彼が四、五歳のときには病没してしまう。本家は、江戸時代に欠かせない染料であった藍の生産と取引で財をなした徳島の豪農・豪商であったが、やがて商店も破産する。旧来の農業・産業が立ちゆかなくなる一方、一寒村にすぎなかった神戸が巨大港湾都市に変貌する。賀川は、不治の病であった結核に肺を蝕まれ、死線をさまよったあげく、余命半年と医師に宣告され、一九〇九年、ロランがヨーロッパにおいて『ジャン・クリストフ』を連載していた頃、神戸にできていた日本最大のスラムの中心部に入り、苦難にあえぐ七千人の人々と生活をともにするという冒険に出る。『死線を越えて』には、中途退学することになった大学での学生生活に始まり、故郷徳島に帰ってきて、瀬戸内海の対岸、神戸のスラムで生活を送っていく実体験がそのまま注ぎ込まれている。

彼を突き動かした根本動機は、残りの人生をイエスに倣って良き生活を送りたいというものだった。少年期にキリスト教から離れたフランス人ロランとは逆に、日本人賀川は、自分を家族のように受け入れてくれたアメリカ人宣教

師に接するなかでイエス・キリストの福音に出会い、理性の敷居を越え、青年期に死線を越えるような神秘的体験をする。死の淵から戻った賀川は、残りの人生をイエスに倣って生きることを「神」と約束し、二一歳でスラムでの生活を始める。

グローバルな資本主義は、必然的に勝者と敗者を生み出していくため、一番の社会的弱者が追いやられ、スラムが生まれる。神戸に形成されたようなスラムは、日本全国でおよそ一〇箇所、産業革命の地ロンドンなどヨーロッパ諸都市から、アメリカ、中国の上海まで、世界的に共通する社会問題であった。『死線を越えて』が英独仏をはじめ各国言語に翻訳されて強いインパクトを与えたのには理由があった。こうして、一九二〇年代には、ロランと賀川は、互いが世界に与えたインパクトを通じて、互いの存在を知るにいたっている。

ところで、ロランのメッセージを自由と精神の独立で代表させるとしたら、賀川のそれは私は、「協同」と兄弟愛だと考える。

世界大戦を勃発させ、世界中に港湾都市を出現させ、スラムを発生させたグローバル資本主義の制御は、今日なお達成されていない。各国は、政府主導の国家資本主義的ふるまいに出ざるを得ず、EUや北米自由貿易協定、東アジアにおける経済的連携の模索など経済圏構築の試みが進められている。他方、スーパーキャピタリズムによって中間層が弱体化し、リーマン・ショック、フラッシュ・クラッシュ等により金融危機が繰り返されている。こうした状況のなか、絶えざる経済成長を追い求めることによって環境危機、格差拡大、非正規雇用の拡大が引き起こされ、世界中で失業率が増加し、機能しない民主主義への不信や無関心、自殺率上昇などの現象が起こっている。

国内の経済問題を解決するため、権益・資源・市場を確保しようとして、大国間の経済圏構築と安全保障戦略のぶつかり合いが生じる。すなわち、世界最大の経済圏となったアジアを舞台に、中国の戦略とアメリカのアジア・太平洋戦略との軋轢が生じ、日本や韓国の立ち位置が困難になっている。同時に、G20に見られるように世界秩序が多極

化し、ときにはGゼロと言われるほど不安定化してきている。

帝国主義、共産主義、ファシズムの過ちと教訓から学んだ人類であるが、グローバル資本主義を修正しつつ、これが生み出す負の側面——人間や自然に対する収奪性——をいかに克服していくかという課題は、ロランや賀川の時代から引き継がれてきているものだ。

たとえば、ロランの自由や精神の独立は当時アインシュタインらの共鳴を得たが、二〇一二年ノーベル医学生理学賞受賞者である山中伸弥教授の、iPS細胞をみんながつかえるものにしたという訴えにもつながるメッセージだろう。今日の多くの科学研究には国家支援が欠かせないものとなっている。特許は、少数のグローバル企業が権益を独占しないために先取しなければならない。しかし、難病やガン、糖尿病の治療に、また製薬に役立つ技術を、倫理問題も克服しながら確立し、富裕者だけでなく多くの人間が恩恵に浴するものとする。それが、同教授の根本的なパッションであろう。

科学研究における自由や精神の独立は守られなければならない。山中氏が研究プロジェクトに広く民間から支援を求め、個人単位からの応援を募っているのも、ロランのメッセージが発した問題と本質的には同じ理由からであろう。iPS細胞研究に従事する研究者の数は限られており、私たちは専門家ではない。しかし、憧れに単によりかかろうとし、あるいは、全否定するのではなく、その研究の節度ある自由を支えるように守ろうとすること、成り行きを見守り、意義ある研究にほんのわずかな金額でも自由な支援の一票を投じることは、多くの人々ができることだ。人間と自然への貢献をめざす科学研究、学問、芸術、文芸、教育、農業、ものづくり、サービス、その他についてもいえることである。自由を見出し、それを守り合うことが大切なのだ。そのためにも、非正規や先の見えない期限付きでない、安定した雇用システムによる職場環境の保障は、科学研究にかぎらず、すべての分野で求められている。

では、賀川のメッセージである協同と兄弟愛とは何か。

彼は、スラムでの生活から始めて、貧困、労働、農業、漁業、都市、消費者、防災、帝国主義と戦争の問題に取り組むことになっていった。いずれもグローバル資本主義の負の側面が作用する、互いに連関する問題であることを洞察し、今日の貨幣価値で十数億円に相当する『死線を越えて』の印税を、すべて社会問題の解決に投入し、文章を書いている原稿料を自身の社会事業に投入する活動を続けていく。そうした試行錯誤のなかで早い段階から賀川が見出したのが、自由な意思による協同組合の実践による社会問題の解決であった。協同組合は国家や企業が提供し得ない社会的ニーズを実現する可能性があり、資本主義の負の側面を解決するのにもっとも適したシステムだと彼は考えた。

近代的な協同組合は、産業革命が始まってほぼ一世紀後のイギリス、ロッチデールで一八四四年、無名の織工たちが力を合わせて自らの生活を守る試みを始めたことに端を発する。吉野作造、賀川豊彦らは、民間ベースで自発的な協同組合を結成して社会問題を解決しようと希望をもち、大正期の日本で先駆的な社会実験を行い、部分的に成功をおさめていった。なかでも、賀川の実践は海外で注目を集め、一九三〇年代にはルーズベルト大統領らに招聘されてアメリカとヨーロッパの数百の都市をまわり、協同組合による社会実践の有効性・可能性を説いた。戦前、協同組合の実践について欧米と日本は学び合う関係にあり、とくに賀川の実践は、広く紹介されたのだ。

その後、ロランが巻き込まれた帝国主義、全体主義、共産主義が吹き荒れ、統制経済、戦時体制への流れに賀川らの活動も停止状態に追い込まれてしまった。しかし、戦前にまかれた種は、戦後、生活協同組合や国民健康保険等として花開くことになった。

今日、協同組合はジュネーブに国際協同組合同盟本部を置き、世界に一〇億の組合員をもち、一億人の雇用を担うまでに成長し世界最大のNGOといわれている。主要三〇〇の協同組合を合わせただけで、その経済規模はG8の一角をなすカナダのGDPに相当し、日本のGDPの三分の一程度に達すると推定されている。賀川の活動拠点であった神戸では、コープこうべが単一の生活協同組合としては世界最大規模にまで発展した。二〇〇八年リーマン・

ショック以降のヨーロッパで協同組合方式の金融機関は、組合員の生活を育成・支援する長期的展望での投資に徹していたためダメージが少なく、株式会社方式の銀行からの預け替えさえ発生した。また、二〇一二年度から国連は、国際協同組合年を宣言し、世界的に協同組合への再評価が高まってきている。しかし、このことは単に、国家や企業がだめで既存の協同組合が素晴らしいということではない。

今後、より大切なことは、自由な意思による協同の可能性を、既存の観念にとらわれることなく、多様な社会分野で試みていくことであろう。

狭い範囲の利権を超えて、協同組合と行政、企業、非組合員の民間人が自由な意思で協同し、社会問題の解決に取り組む。そのためにも、先駆的な賀川の協同について、深く掘り下げて理解することが必要である。そのメッセージをつかんでいけば、たとえば、インターネットにアクセスして、社会問題を解決しようとする医療研究や災害復興のための地元の産業プロジェクトに、少額であれ一民間人の立場から自由の意思で支援し、交流の環をひろげていくことも協同の行いであることがわかる。

賀川は、協同に人々を向かわせる内的動機が、自分にとってはイエスの愛の精神であると確信していた。そして、このことを、とくにキリスト教の文化伝統の厚みをもつ欧米社会に訴えた。それが兄妹愛、人に向かう愛であり、たとえ自分が損をすることがあつたとしても人のために何かをしよう、という心の働きである。賀川がユニークなのは、そういう心の働きを、キリスト教はもちろん、孔子や仏陀の教えも理解する余裕がないスラムの人々の、道徳的退廃や犯罪的行為を経験しながらも「俠客道きやくだう」と彼が呼ぶ、強きにおもねらず困っている仲間を助けようとする姿勢に発見し、協同の発露として、希望をもつことができたことである。賀川は、いかなる絶望的な状況でも、協同の可能性を確信したがゆえに希望をもちつづけ、数々の社会事業に身を投じていった。社会的起業家の先駆者として、彼ほどふさわしい人物を近代日本に見つけることはできないだろう。

では、なぜ賀川の協同と兄弟愛は、ロランの自由と精神の独立に響き合うのか。そこで異なる心的世界のレゾナンズが起るのか。それは、賀川の協同は自由によって初めて成立するものであるためだ。協同は、国家や特定の指導者の物理的・精神的強制によるものではない。協同組合方式においては、各人の自由が発揮されながら、協同によりさらに実り豊かな成果をあげていくことが期待されているからだ。強制によってしか協同できないなら社会の組織化そのものを求めないという信念を賀川は貫いていた。

たしかに、ロランと賀川の共振は、同時代には本格的な実現にはいたらなかった。しかし、二一世紀には、彼らが体現していたメッセージの響き合いが、もつとも先鋭的な課題の一つとして浮上する。ロランと賀川を合わせ鏡にすれば興味つきない精神世界の万華鏡が浮かび上がる。そこからは、汲めどもつきない精神の泉が流れ出る。

賀川は精神の独立を体現しえたロランの価値を受け止めていた。

「かうして吾々は自然的宿命から社会的宿命に、社会的宿命から心理的宿命にとだんだん内質的な宿命に囚えられねばならなくなつたが。ロマン・ローランのいつた言葉は、やはり最後まで吾々に遺されるであらう。『宿命とは自己が決定しない他のすべての部分をいふ』即ち靈魂が少しでも成長し、内部的の勢力が少しでも強く伸び上つて、外部的な勢力を噛み破り得るならば、そこに宿命の思想は忽然として滅却されてしまふ。」

『愛の科学』一九二四年（賀川 一九六三 a 二〇二—二〇三頁 傍点筆者）

「ゼネヴァ湖畔、『戦争の上に』を書いてスイスに逃れたロマン・ローランが、今なお、その湖畔を離れ得ないで、湖面にうつるアルプスの英姿に、独居の哀愁を慰さめて居る、そのゼネヴァ湖畔——私はその自然の上に、そこを去ることを欲しなかつた。」

『雲水遍路』一九二六年（賀川 一九六三 b 一四八頁）

ロランはドイツやスイスの雑誌から賀川の活動を知って、その意義を認め、詩人尾崎喜八宛の手紙で関心を表している。

「彼の道徳上の個性と社会事業とはりっぱなものに思われます。ただ遺憾に思うことは、そのいづれもがキリストの名だけによって限られていることです。私はキリストを愛しています。けれどもキリストの十字架の影が地上全体をおおってしまうことは望みません。私はあまたの星々に満ちている空を望むのです。」

一九二四年（ロラン 一九七九 四〇三頁）

ロランは賀川に二度、手紙を出し、スイスのヴィルヌーブの自宅を訪ねるよう声をかけている。ガンディーが一九三一年にスイスにロランを訪ねた際にも、賀川の名が出されていたという。

賀川は、自身最初の欧州訪問記のなかで、スイス亡命中のロランに思いを寄せる言葉を記し、帰国後、友人たちとの座談会でロランからの手紙に「あなたが社会運動の中にキリスト教を宣伝していることを喜ぶ」という内容が書かれていたことを打ち明け、「世界の正直な人達は僕等と同じ様なことを思っている」との感想を語っている。しかし、当時のロランは賀川の活動がキリストの名をもっぱら掲げたものであること——とりわけ、欧米のキリスト教界によって賀川が受容されるなかで、その印象が倍化されていたのであるが、——に残念な思いをもち、賀川の方でも、ロランと交流をもつ日本の文学者たちと、社会問題の解決のために文筆活動を行なっている自身との隔たりを感じていたせいで、ジュネーブまで訪れる機会がありながら、ロランに会うことをせざるましましている（米沢

二〇〇七 八一—一四頁）。

ロランが五〇代後半、賀川が三〇代後半であったから、賀川の方が血氣盛んなもの言いである。しかし、賀川の『死線を越えて』が大成功を収め、改造社に巨額の収入をもたらした。社長の山本実彦（まひこ）は社会還元としてバートランド・ラッセル、アインシュタインといったヨーロッパの一流知識人を初めて日本に招聘した。その過程で、改造社が派遣した編集者・室伏高信がラッセルの紹介状をもってジュネーブのロランを訪問し、『改造』はその「ロマン・ロラン訪問記」を掲載し、ロランの『先駆者』も一九二四年に翻訳掲載している。

『カイエ・ド・ラ・キャンゼース』誌（『半月手帖』が『ジャン・クリストフ』によって地歩を固めたように、雑誌『改造』と改造社は『死線を越えて』によって財政的・社会的地歩を固め、雑誌『中央公論』と並び戦前期の日本を代表する総合誌に成長し、志賀直哉の『暗夜行路』をはじめ、多くの名作や進歩的評論が掲載されていたのである。

### 三 ロランと賀川のレゾナンス（共振）

ここに、ロランと賀川が合わせ鏡となつて、いかに心的世界の万華鏡を見せてくれるのかを明らかにしよう。

ロランも賀川も、自国で非主流の宗教的信念を青少年期に抱くことになった。ロランは汎神論ともいえる大洋感情、賀川は救い主イエスの愛。そして、それが、自国や自らが属する文化圏以外では主流の、または親和性の高い宗教的信念であることから、自国と自らの文化圏を越えて世界的名声を博することができた。ロランはガンディー、タゴールのインドや日本の青年からの敬愛、賀川はアメリカ、欧米での熱狂的な親愛を得た。

しかし、ロランはソ連を導こうとした過ち、賀川は軍国主義・統制経済に傾斜する大日本帝国内での無力を経験した。迫りくる戦争を予知しながら、また、それを避けるための方途に全力を尽くしながら、ロランは独ソ不可侵条約によって、賀川は真珠湾攻撃によって、もっとも苦しい精神の隘路に封じ込められた。第二次大戦後しばらくは一時

的な受容がなされながらも、ロランは共産主義の実験の失敗がいつそう明らかとなり、賀川は日本の高度経済成長、バブルの影で忘れ去られていった。しかも、ロランも賀川も自国では非主流の宗教的信念の持ち主であり、その信念に基づく実践者として人生の大半を生きたため、継承者を得にくかった。

しかし、ロランの声が、キリスト教文化圏を越えて、広くアジアに届いたことは事実である。そして、日本は、片山敏彦、宮本正清らの研究・訳業と小尾俊人のみならず書房の『ロマン・ロラン全集』刊行の仕事を通じてロラン作品の最大の翻訳紹介国となった。また、賀川は、今日もアメリカ及びヨーロッパにおいて、静かながら研究関心が持続しており、ワシントン大聖堂には、アジア人として唯一、賀川豊彦の胸像が刻まれている。

そして、両者とも、晩年に、自国・自文化圏の主流の宗教的信念への傾斜を見せていた。ロランは福音書のイエスやカトリックのマリア信仰に取り組み、賀川は戦時中、『宇宙の目的』（一九五八）を書きついで、キリスト教の枠組みにとどまらず根源的な悪の克服のテーマに取り組み、『東洋思想の再吟味』（一九四九）という作品も書いている。

いずれも、ヨーロッパと東アジアの中間に位置するインドのガンディーと会見し、深い対話を行った。

そして、ロランの弱点を賀川が、賀川の信仰のわかりにくさをロランが補う関係を見出すことができる。何よりも賀川は、共産主義ソ連の限界をその始まりから見抜いていた。彼はスラムに住みながらマルクスの『資本論』を研究し、唯物主義の限界を明らかにしようと『主観経済の原理』を書いた。それが『死線を越えて』と同年の一九二〇年に出版されているのだから驚くべきことである。賀川は、ソ連政府から協同組合の協力を非公式に要請されたが断っている。自由が失われる強制による組合は失敗するというのが、その理由であった。そして、彼が、ソ連の限界を見抜くことができたのは、救い主イエスを通じて彼が理解した人間観ゆえであった。これはロランが最晩年に理解したイエス観とかなり近い内容を含んでいる。最晩年のロランが、賀川を詳しく知ることがあれば、深く共感するところがあっただろう。また、賀川のほうでも、ロランをより深く理解できたであろう。

しかし、両者を響き合わせることは、私たちが継承した仕事である。

両者のレゾナンス（共振）から、より多くの豊かな発想と新しい人々のふれあいや、つながりを創りだしていくことができるだろう。フランスと日本、ヨーロッパとアジア。汎神論と救い主イエスの福音。キリスト教文化伝統と東洋の文化伝統。両者は合わせ鏡であるから、ロランのなかのキリスト教伝統、賀川のなかの東洋宗教伝統（仏教や儒教や自然の神々）もそのなかで響き合うだろう。

自由と協同。それは、寄りかかるとべき理念ではなく、私たちが、今、これから、守っていく可能性である。ロランの自由に響き合い、これを守るキリスト教や東洋宗教伝統、人間性、賀川の協同に響き合い、これを守る、キリスト教、東洋宗教伝統、人間性がこれから求められてくるのではないか。

そういう光景は、ここにある。ロランのことばが、たとえば、この日本において、語られ、紹介されているのだ。

#### ロマン・ロランのことば

「百の頭をもった、帝国主義と称されるこの怪物、この傲慢と支配欲が、すべてを吸収しようとし、あるいは服従させようとし、あるいは粉砕しようとして、自分以外には自由な偉大さをけつして認めようとしないのである。」（ロラン 一九八二 二八頁）

「ヨーロッパの選良よ、私たちは二つの国、すなわち私たちの地上の祖国と、もう一つ神の国をもっている。一つの国では私たちは客人であり、他の国では私たちが建設者である。前者には、私たちの肉体と忠実な心情を与えよう。しかし私たちが愛する家庭も、友人も、祖国も、いずれも精神にたいして何の権利ももたないのである。精神は光である。それを嵐の上に高くかかげて、光を暗くしようとする黒雲を遠ざけることが義務である。

諸国の不正と憎悪を見おろす、全世界の同胞的な自由な精神の人々が寄り集うべき都の囲いを、より大きくより

高く、築くことが義務である。」(同 三〇一—三二頁)

「私はヨーロッパを説得するために語るのではない。私は自分の良心を鎮めるために語るのである……。そして同時に、すべての国々において語るのことができない、あるいはあえて語ろうとしない幾千の人々の良心を慰めるであろう、ということをお私に知っている。」(同 三二頁)

「戦いを超えて」『ジュルナル・ド・ジュネーブ』紙、一九一四年九月二五日号

「日本の青年たちにおくるメッセージ

日本の青年たち、この本をあなた方におくるにあたって、私は兄弟としての言葉をいくつかつけ加えたいと思います。なぜなら、ヨーロッパの文学者の私がある方に言葉をかけるとき、私はあなた方を違った人種の人々とみなすのではなく、共同の仕事をもつ魂の兄弟とみなすからです。」(同 一一三頁)

『先駆者たち』日本語版序文、一九二一年八月一二日 \*もと大沢章訳で改造社から一九二四年に出版された。

「われわれが尊敬するのはただ一つ、自由な、国境なく、限界なく、人種や階級(カースト)や偏見のない『真理』だけである。もちろん、われわれは『ユマニテ』「人類・人間性」に関心を失いはしめない！ われわれは『ユマニテ』のために、だが『ユマニテ』全体のために働く。」(同 三〇三頁 傍点原文)

「精神の独立宣言」『ユマニテ』紙、一九一九年六月二六日、『先駆者たち』所収

### 賀川豊彦のことば

「彼は死を飛び越えて、神秘の世界に突き込んでいるという一つの信念を持っていた。(中略)彼は、また云い

知れぬ、實在の不可知な驚異に巻き込まれた。それは、凝視する光の一点が、虹のように見え、自分の横たわっている部屋がバラダイスのように感じられ、美しくもない彼の着ている布団が錦襦きんらんで造ったかのように見えた。そして彼の父なる神の手にしっかり握られていること…否…神は父と呼ぶべきものよりか更に接近したものであつて、彼自身にすら住み給うものであつて神自身に彼が漬かっているという実感の喜びを感じた。」

(賀川 二〇〇九 二九六頁)

『死線を越えて』改造社、一九二〇年

「私は、不思議な運命の子として、神聖な世界へ目醒めることを許された。そして、人間の世界の神聖な姿と、自然の姿に隠れた神聖な實在を刻々に味うことが、私の生活のすべてになつてしまった。二二の時に、貧民窟マダモに引摺られたのも、この神聖な姿が、私をそこへひこぎずつて行つたのだつた。そして、私の芸術も、この美を越えた聖、生命の中核をなす聖なるものを除いて何もものでもない。」(賀川 二〇〇九 七頁)

\* 賀川本人により『死線を越えて』冒頭に加筆された一文

(帝京大学准教授・比較宗教文化、日本研究、文明論)

## 文 献

賀川豊彦「愛の科学」『賀川豊彦全集』第七卷、キリスト新聞社、一九六三a

賀川豊彦「雲水遍路」『賀川豊彦全集』第二三卷、キリスト新聞社、一九六三b

ロマン・ロラン「戦いを超えて」「日本の青年たちにおくるメッセージ」「精神の独立宣言」『ロマン・ロラン全集』18

宮本正清他訳、みすず書房、一九八二

ロマン・ロラン「日本人への手紙」『ロマン・ロラン全集 36』宮本正清・蛭原徳夫訳、みすず書房、一九七九

米沢和一郎『賀川豊彦の海外資料Ⅱ その意図したものを読み解くために』明治学院キリスト教研究所、二〇〇七

賀川豊彦『死線を越えて』PHP、二〇〇九

ベルナール・デュシャトレ『ロマン・ロラン伝 一八六六―一九四四』村上光彦訳、みすず書房、二〇一一

村上光彦『最後の扉の敷居で』から」一〇二一『ユニテ』二七―三〇、三三―三九号、ロマン・ロラン研究所、二〇〇〇―

二〇一一

## 「ロマン・ロランと賀川豊彦」講演会の感想

奥村 一彦

濱田先生の賀川豊彦研究のご講演、熱の入ったたいへん素晴らしい講演でした。一生懸命調べて臨まれていることがよく分かりました。

賀川豊彦という、現在ではあまり知られなくなった、かくいう私もあまり知らない宗教者のお話ですので、どのようなお話が聞けるのか興味津々でした。ちなみに私はロランについては勉強不足で、賀川豊彦は父親が一時傾倒して酪農に参加したとかいうことを聞いたことがある程度です。

まずはじめに、先生のお話の中核は宗教で、捉えがたいものを言語で表現しなければならぬという負担を負うのですが、これをわかりやすく話そうという姿勢に知

的な誠実さを感じました。宗教を対象にすることは、ひとりの人間の内心に生じた決定的な出来事を探ったり、肉体をもつ人間の宿命ともいえるその生きている時代との格闘から生まれる思想と深く関わっているため、なかなか客観化して説明し難い分野だと思います。

それをご承知の上で、心のあり方というものを、ロランについては大洋という表現で説明されました。はじめは適切な表現かどうか分からなかったのですが、聞いていくうちに、決して茫洋とした話ではなく、明快な論旨を展開するには必要な方法だと思ふようになりました。共通するイメージで説明するという効果的な方法だと思います。

ただ、やはり、内心は刻々と変化しますし、自分自身でも捉えがたい心理というものがありますので、固定的にならないようにと思います。

根源的な体験ということで、昔、高橋竹山が、三味線一つで、炭鉾を回って食べ物物乞いをしていたときに、一番優しかったのは極貧の朝鮮人だったとNHKの番組で言っていたのを急に思い出して、先生にご質問させていただきました。おそらく竹山は、生涯朝鮮人を、そして朝鮮を愛したでしょう。そういう根源的な体験、出会いこそが宗教的な体験というもので、それが人を変え、自由に向かって進むことができるようにさせるのかなと思います。

ロランも賀川も徹底的な孤独や差別を体験していて、そこを通過して大人物になったのではないかと想像します。その意味で、多少人間は、差別や迫害を体験して大きくなるのかなと考えたりします。

今回の濱田先生のご講演は、知識の普及にとどまらない、心を揺さぶる講演であったように思います。私の質問へのご回答の中で触られました朝鮮儒教の話には、

大いに刺激を受けました。ありがとうございました。

(ロマン・ロラン研究所評議員／弁護士)

## ロマン・ロラン『ヴェズレー日記 一九三八—一九四四年』について

村上光彦

昨年（二〇二二年）、パリのバルティヤ社から、ジャン・ラコスト氏の編集により、標記の浩瀚な書物が刊行された。この新刊書は、本誌上で多年にわたって紹介してきたベルナル・デュシャトレ編『最後の扉の敷居で——書簡および未発表文書（一九三六—一九四四年）付載——』（福音書についての対話）（一九八九年、エディシヨン・デュ・セール社刊）、同じくデュシャトレ氏の著作『ロマン・ロラン伝』（原題『あるがままのロマン・ロラン』（二〇〇二年、アルバン・ミシエル社刊））のなかの第七章「ヴェズレー 一九三七—一九四四年」と並んで、ロランがブルゴーニュ地方のヴェズレーで過ごした最晩年におけるロランの生き方を詳しく知るうえで、欠かす

ことのできない資料だ。これらの文献からは、ロマン・ロランが生涯の最後期に到達した思想と行動との究極のかたちが浮かび上がってくる。

ただロランひとりにとどまらず、さらに広く全世界が史上稀有な危機の時代を潜り抜けていった様相全体を、一望のもとに見渡すのに役立つ第一級の資料でもある。その原書名は左記のとおり。

Romain Rolland, *Journal de Vézelay 1938-1944*

Edition établie par Jean Lacoste

原書の裏表紙に記された編者の紹介文によると、ジャン・ラコスト氏は哲学者にしてゲルマニスト（ドイツ語

ドイツ文学・ドイツ文化を専攻する研究者だ。その方面の労作としては、ゲーテについての数点の著作があり、ニーチェおよびベンヤミンの書物も何点か翻訳出版している。氏は何年か前から、ロマン・ロランの作品にも関心を寄せてきたとのことだ。ドイツ文化研究者がロランに興味を抱くのは当然のことだ。ロランは二〇世紀の初頭に、年下の友人シャルル・ペギーが心血を注いだ『カイエ・ド・ラ・カンゼーヌ』誌に熱心に協力してきた。いかにもフランス人らしいこの二人の友情のなから、ロランの『ペートーヴエンの生涯』（一九〇三年）、『ミケランジェロの生涯』（一九〇六年）を初めとする偉人の伝記が、そしてなによりも『ジャン・クリストフ』（一九〇四―一九一二年）が生まれ出たのだ。ジャン・クリストフという主人公には、ロランが独仏の善隣関係を健全に育てたいと願っての、心からの念願がこめられている。編者ラコスト氏も、やはり西欧に生を享けた知識人として、ロランのこの思いに共鳴したのにちがいない。ロランの晩年の日記がこのような文化継承者によって編集・刊行されたのは歓迎してしかるべきことだ。

この『ヴェズレー日記』に収録されている、マリールール・ブレヴォー氏の小論「ロマン・ロランの『日記』」もおおいに参考になる。このような書誌学上の事は、文学研究の土台となる必須の基礎作業だ。

ブレヴォー氏の調べによると、ロランが日記を書く習慣を身につけたのは、少年ロマン・ロランの一家が幾代にもわたる郷土ブルゴーニュ地方での暮らしを打ち切つてパリに移り住んでから間もない時期だったという。ロランはそのころから始めて、多年にわたって日記を小型の手帳にしたためていった。その分量は六〇年のうちに手帳一一七冊となっていた。一九二九年、ロランはそれらの日記帳を保存することとし、当時彼が住んでいたスイスのバーゼル大学図書館にこれを寄託した。

ロマン・ロランは早くも幼時に、自分が己自身の世界に幽閉されている囚人であると自覚した。幼児のロマンは、自分の部屋から見える小さい世界を牢獄のように思ひなした。長じてのち、彼の幽閉者としての意識は、シエークスピアのハムレットへの親近感となる。

さて、ロランは若いころから、自分がいま成長途上のどの地点に達しているかを自省してやまなかった。彼の大河小説『ジャン・クリストフ』の初めの部分に、幼い主人公の目がまわりの生活環境に向けられてゆく過程が語られている。ロラン自身、この幼い主人公と同じく、生涯をつうじて世界のなかでの自分の立ち位置を絶えず測定してやまない人だった。

ロランの目は自分の内面ばかりか、まわりで転変してゆく世界の時々刻々の状況にも向けられていた。そのことは日記からも知られるし、それと並んで、ロランが全世界に散らばっている知友に書き送った膨大な手紙からも読みとられる。ロランの生涯に書き溜めた日記と書簡とは、ロラン自身の人生の歩みと並んで、一九世紀から二〇世紀へと跨がる世界の近現代史を読み解く助けとなってくれる。

ところで、ロランがこの時代を生き抜いた姿勢の軸をなしていたのは、反戦および平和という主題にはかならない。『ヴェズレー日記』紹介のためのこの小文も、その主題に即して語り進めることとしたい。

さてロマン・ロランは、一九一四年に第一次世界大戦が勃発したとき、たまたまスイスに来ていたのだ。反戦的発言を行う都合から、戦争の苦難を迎えた同胞を見捨てて、身の安全のために中立国のスイスに逃れ去ったわけではない。彼は亡命者などではなかった。ひたすら自由<sup>①</sup>に生きた人だったのだ。

ただ、彼は、第一次世界大戦中の歳月をスイスで過ごしたおかげで、全世界の情勢を有機的な全体として、戦時の様相の移り変わりに即して観察することができた。彼はスイスにいたからこそ、全世界から届く情報を広範囲にわたって入手することができた。第一次大戦時のスイスでの知見は、たしかに彼のそれ以後の成長のために大いに役立った。そのことは、一九五二年に一冊にまとめて刊行された『戦時の日記』を精読すれば明らかになってくる。この歳月は、戦間期におけるロランの活動を準備したのだ。ともあれ、彼が第一次世界大戦勃発後まもなく、彼の反戦の意志を新聞紙上で明らかにできたのも、ロランがそのときまたまたスイスに来ていたからなのだ。第一次大戦時には、スイスのレマン湖畔の都市ジュネー

ブが、ロランの見張り場所だった。そして『ヴェズレー日記』の時期になると、ロランはヴェズレーの高台にこの見張り台を移したのだ。

ここでブルゴーニュ地方に目を転じて、一九三八年九月末のミュンヘン協定調印の時期のヴェズレーについて語ろう。そのときロランは、すでに住み慣れたスイスの住居から移り住んで、故郷の小都市クラムシーに近いヴェズレーに居を定めていた。

それより先、前年の一九三七年六月には、ロランはいったん友人ルネ・アルコスの家に身を寄せた。さらに最終的に住みつく場所を探し、あちこちフランス国内の各地を見にいった。その家探しのすえに、彼は人に教えられて一九三七年八月、ヴェズレーの高台にある石の家のたたくまいが気に入った。そして一九三八年六月、ロランはヴェズレーの高台のこの家に移り住んだ。

ロランがこの地に住みついてからというもの、アラゴンやトレーズなどフランス共産党の要人がロランをヴェズレーに訪れだし、さらにベルギー王妃とバイエルン王

女とが連れ立ってロランの家を訪れた。それまでの田舎町ヴェズレーにはなかったことだ。この町の善良な市民には、共産党員が来るかと思うと王妃・王女も訪ねてくるものだから、ロランのことをどう見たらよいかわからなくなった。

ヴェズレーの町を訪れると、小高い丘の頂に、大聖堂ペジリツェがいまも変わらず、崇高な威容を見せて聳えている。本邦で言えば、鎌倉・藤沢に近い江ノ島を連想させる風景が町の中心部の特徴をなしている。江ノ島が海岸から近づく橋を渡り切った先に、たゆたう海原に浮かんでいるのと似た景色だ。海原を思わせる平原から盛り上がっている丘の頂を目ざして坂道を登ろう。この町を貫いて伸びる一筋の坂道は、海岸から土産物店に挟まれて高みを目指す島の中央の参道のようなだ。じっさい、それは大聖堂を目指す参詣者が登ってゆく参道にほかならない。そしてロマン・ロランが六年半の歳月を過ごした石造建築は、かなり高く登った丘の中腹にあり、その裏手に回ると、中世城郭の斜道を思わせるなだらかな道が表通りに並行して走っている。ロランの家の裏に立つと、ブルゴー

ニュ地方のゆるやかに起伏する山野が巡回路の胸壁ごしに見晴るかせる。

ヴェズレーに移り住んでから六年半ののち、フランス全国民が戦時の苦難に耐えていた時期のこととて、彼もまた暮らし向き不如意を余儀なくされ、そのなかでロランはついに力尽きて世を去った。

この六年半は、ヨーロッパばかりか全世界の規模にわたって、ヒトラーとスターリンとが怪物的な影で時代を暗くかげらせていた。この二人の途方もない活動が、全世界に巨大な影響を及ぼしていた。それは世界史上にまたとない大変動の時期だった。

その時期、ロランは表向き目立つ活動を控え、公的な場での発言も減らしていた。しかし、彼の内面生活は、相変わらず充実していたのだ。彼が内輪にとどめていた私的発言は、直接の影響力こそ減じていたものの、内容はずつと豊かでありつづけた。そしてロランの死後何年も経ってから、ロランの日記のいくつかの部分が——遺言により発表を控えさせるための封印が全面的に解除さ

れたわけではなかったが——しだいにさまざまな形で公の場で印刷公表されるようになっていった。封印が解けて、ヴェズレー日記が公刊されたいま、わたしたちもそれをひもとくことができるのだ。

さて、ロランがヴェズレーに移り住んでからそう日の経っていない一九三八年九月、ヒトラーはニュルンベルクにおけるナチ党大会において世界を驚倒させるような発言をした。チェコスロヴァキアのズデーテン地方に在住するドイツ系住民の自決権を主張したのだ。

この演説からまもなく英国首相チェンバレンは南ドイツのベルヒテスガーデンのヒトラーの山荘で彼と会談した。その席上、ヒトラーはズデーテン地方をドイツに割譲せよと主張した。その直後、フランスの首相エドゥワール・ダラディエおよびボネ外相はロンドンに飛んで、その件について相談した。ついで九月一九日、英仏両国はチェコに圧力を加え、ドイツのこの要求を受諾するように勧告した。二日後の九月二一日、チェコ政府は民意の反対を押し切ってヒトラーの要求を受諾した。二二日、チェンバレン英首相はドイツのゴータスベルクに赴き、

またまたヒトラーと会談した。チェコがまったく抵抗しなかつたわけではない。ただ、そのすぐのちには、英仏独伊四国によるミュンヘン会談が行われ、ズデーテン地方のドイツへの割譲が決定された。英仏はかたよきの平和を願って、対独宥和政策に出たのだ。こうして九月二九日にミュンヘン協定が成立し、翌日にはそれが調印された。チェコのような小国には、英仏に対抗して単独でヒトラーへの抵抗を続ける力などあるわけもなかつた。

この時期の『ヴェズレー日記』を読むと、一九三八年九月、ロランは日記にこのように記した。

「九月二二日晚、わたしはラジオで、ニユルンベルク党大会におけるヒトラーの野獸的な吠え声と、ドイツの民衆の狂熱的な拍手喝采を聞いた。この民衆は、ヒトラーが投入するところへと、彼につき従ってゆく覚悟ができているのだ。——全世界の人々がわたしと同じく、不安に胸をしめつけられながら聞き入っているのだ。世界の平和が、世界の殺害が、われこそ〈宿命〉の人と信じ込んでいる、この気の触れた男の手中にあるのだ！」

一九三〇年代のドイツ共産党はエルンスト・タールマ

ンの指導下にあつた。タールマンはヒトラーが一九三三年に政権を奪取するとともに、ナチス党よつてパウツェンの強制収容所に収監され、一九四四年八月にブーヘンヴァルトにおいて処刑されることとなる。ロマン・ロランはバリーに組織されたタールマン委員会の議長のひとりをつとめていた。一九三八年九月一七日、このタールマン委員会は、フランスおよびドイツの反ファシズム知識人の宣言に署名した。それは一種の宣誓といえるものだった。その宣言にはこうある。

「極度の緊張の日々である。このときにあたり、イギリス首相ネヴィル・チェンバレンは、ベルヒテスガーデンめざして、ヒトラーと話し合うために急遽飛行機で飛び立つという振る舞いに出た（誇り高い大英国にとつては前代未聞のことである）。」

平和主義者と称する人物がロランに手紙を書き送つて、彼がズデーテン地方の住民にたいして、みずからの帰属する国を選択する権利を否定しているとした非難を投げつけた。九月一八日、ロランはこう答えた。

「わたしはズデーテン地方については、一言たりとも

語ったり書いたことはありません。どういうわけで、あなたのお手紙のなかにあふれかえっている憤激を蒙ることになったのか、自問しております〔……〕。わたしにもまして戦争への憎しみを抱いている者はいませんし、戦争を阻止すべくわたしにもまして闘っている者はおりません。わたしにもまして、平和の防衛に専念している者は、ひとりとしておりません。」

「しかし、真実のところ、今日のドイツについての、またその《総統》<sup>ヒトラー</sup>についてのわたしの明確な知識からして、わたしはこのように確信するにいたしました。すなわち、平和を維持する最良の方法は、災厄のほぼ避けやうのない進行に対置すべき盟約を結ぶことにあります。」

ロランはさらにこのように論を進めている。——「讓歩に讓歩を重ね、不断に後退と断念とを続ける政策をもつてしては、この政策を実行してゆく人たちを救うことにはいっとう役立たないのです。そのような政策をとるならば、彼らは容赦ない計画を遂行して、そのあげく、チェコ国民は決して方針を逸脱することのない敵の手に

委ねられることとなりましょう。いくぶん時間を置いてから（あとでといつても、そうあとのことにはならないのです）。孤立し、裸にされ、無防備となつてからのことです。〔……〕平和主義者は共産黨員と同じように、ヒトラーに憎まれ、そして訴追されております。」

この当時、ロマン・ロランは、彼がかつて言いだした《戦いを超えて》という表現が、なによりも平穩無事を願う、遅れて《平和主義者》と自称する連中に乱用されているのを見て嘆かわしく思っていた。

ロランはなによりもヒトラーのめざす世界制覇の野望に抵抗しようと考えていた。一九一四年には真の平和を欲して編みだされた思想が、二四年経つてみると、結果的にヒトラーの思惑に添った合言葉と化してしまっているのが、ロランにとつてはがまんのない状況だったのだ。

ロランは、いまでも『ジャン・クリストフ』執筆時と同じく、フランス国民とドイツ国民との協力を念願していた。しかし、その理念は《抑圧に対抗して》こそ実現

されるべきだった。そこでロランは一九三八年八月にフランスのタールマン委員会（ロラン自身、その議長の人だった）の提唱のなかでこう論じた。

「わたしは平和をねがっている。しかし、卑怯さによって立つ政策はフランスの誓約を引き裂くものであり、フランスに信頼を寄せた人たちを裏切り——そしてフランスみずから、自国の周辺に孤立を生ぜしめ、その結果としておのれの計画を執拗に追求している仮借なき敵に自国を引き渡すこととなるのである。」

彼はミュンヘン協定の行方を見ながら、チェコを指導してきた賢者マサリクの身を案じた。マサリク（一八五〇—一九三七）は一九一八年にチェコ共和国の大統領に選出され、九年後の一九二七年にその地位に再選されたものの、一九三五年にいたって四国の状況に抗しきれなくて辞任したチェコのすぐれた指導者だった。マサリクはフランスの民主主義を信じて、それを愛していた人物だったのだ。フランス首相ダラディエが、ミュンヘン協定においてかりそめの平和のためにヒトラーに屈服したことを、ロランはマサリクにたいしても心の中で恥ず

かしく思っていた。ロランには、トロイ戦争の時代のギリシアの故郷に入れられぬ預言者カッサンドラと同じ嘆きを抱くのだった。

ロランはその当時のフランスにも、使徒のような志を堅持し、殉難しようと覚悟している若者がいるのを知っていた。しかし、それらの若者が困難に殉じたとき、彼らの血が同胞に汲みとられるのは、ずっとあとになってからだろうと予想された。彼にとつて、見ることに聞くことすべてが心の痛むことばかりだった。

一九三八年秋、彼はポール・ニザンの思想と行動とに感服した。ニザン（一九〇五—一九四〇）はエコール・ノルマル・シユペリユールを出てフランスの大学教員資格<sup>アグレガシヨ</sup>を取得していた俊秀だった。ニザンは共産党系の新聞『ス・ソワール』紙に寄稿して、フランス全国に《恐怖の組織》ができあがってゆく状況を慨嘆し、告発した。ニザンは《恐怖を制圧する精神の力》を強調したのだ。（なお、ニザンの著書『九月のクロニクル』の邦訳を村上光彦はすでに晶文社から出しているが、この邦訳のなかに引用されているヒトラーの演説の文体をいつかは改

めて、ヒトラーの狂気じみた語調が出るような訳文に直したいものだ。

一九三八年一月二—三日に、〈平和と自由〉をめぐす（アムステルダム・プレイエル）運動の大会がパリで開催された。ロランはこの運動の名誉議長だったのだ。ロランはこの大会のためにアピールを送り、そのなかでこう論じた。

「同志および友人諸君。わたしたちの掲げる〈平和と自由〉とを囲んで、これまでもまして結集いたしましょう。わたしたちの美しい旗は汚されています。このすばらしいことがじつに輝かしい光輝を放っているものですから、これと闘う最悪の敵どもは、まずこの二つのことを奪いとって自分たちが利用せんがために、これを彼らの手中に収めなくてはならないのを悟ったのです。新しい世界の希望と意志とを踏みつけ、踏みじっているやからどもは、いまや口のなかに〈平和〉という語を頬張っております。そしてそのことば自体が、恥ずかしいことに変質してしまっています。また彼らは〈自由〉をわがものとして叫び立てていますが、彼らにあつ

てはその語は搾取を助長するものにすぎないのでありません。」

ロランはこうも語った。——「平和とは、一国民の数々の聖なる義務・その品位・おのれが発した誓いのことば・抑圧にたいする抵抗を表現しているのであって、それらを断念してしまう卑怯な利己主義などではありません。」

「わたしたちの理想にその本来の真実と力強さとを戻すために、わたしたちの理想を補足し、またそのもとの意味を十分に回復できるよう、ほかの二つの語を加えなくてはなりません。すなわち正義および平等ということばを。」

「真実の平和は、かならずや正義のなかにその根を下ろしています。平等を土台として築かれていない真の自由などありはしないのです！」

「もろもろの階級および人種のあいだの平等。社会上および政治上の正義を！」

（『ユマニテ』紙、一九三八年一月二—三日付）

ミュンヘン協定が結ばれ、いったん平和が確保されたかに見えたものの、一九三九年夏から秋にかけて事態は急変した。

一九三九年八月二三日、モスクワで独ソ不可侵条約が調印されたのだ。その激震は本邦にも波及した。日本はおりしも日独伊三国同盟の締結を目指していたのだが、この同盟は日本としてはまずソ連の共産主義が日本に侵入することを防ぐべく、もともと反共同盟の性格を有していた。ところがヒトラーがスターリンと手を結んだため、この第一目的は突き崩された。一九三九年八月二五日、日本の閣議はやむなく三国同盟交渉打ち切りを決定し、時の平沼内閣は〈欧州情勢は複雑怪奇〉と声明して総辞職した。フランスでは左翼知識人がソ連の動きに反発し、共産党からの離党が相次いだ。ロランもまた、このときスターリンと決別した。そして八月三十一日、ヒトラーはポーランド攻撃命令を発し、九月一日には独ソが南北からポーランド国土への侵略を開始した。こうして第二次世界大戦が始まった。

『ヴェズレー日記』一九三九年九月一日の項。——  
「ヨ、ロ、ッ、パ、戦、争、が、夜、間、に、ド、イ、ツ、軍、部、隊、の、ポ、ー、ラ、ン、ド、侵、入、と、ポ、ー、ラ、ン、ド、諸、都、市、へ、の、爆、撃、と、よ、つ、て、火、蓋、を、切、ら、れ、た。——戦、争、は、習、慣、ど、お、り、〈虚、偽〉を、旗、印、に、か、か、げ、て、開、始、さ、れ、た。ヒ、ト、ラ、ー、は、小、手、先、で、ポ、ー、ラ、ン、ド、へ、の、見、か、け、だ、け、の、提、案、を、し、て、見、せ、て、同、国、に、責、任、を、押、し、つ、け、た。い、か、な、る、強、盗、国、家、で、も、正、義、と、自、由、の、正、当、な、権、利、と、を、申、し、立、て、な、い、で、よ、い、と、思、つ、た、り、は、し、な、い、！ そ、れ、と、い、う、の、も、善、良、な、人、た、ち、を、引、き、ず、り、込、む、必、要、が、あ、る、か、ら、だ。  
——それぞれの国のラジオが、電波戦にあたって準備のための射撃を交わしている。ドイツの放送局が非常にたくみなフランス語を駆使した放送によって、フランスの世論を掻き乱そうと努めているのが聞こえてくる。またフランスおよびイギリスの放送局は、それぞれのドイツ語放送によって、ヨーロッパ全域に電波の洪水を生じさせている。」

「九月二日。——フランスにおける総動員の初日。わたしたちの家の向かいにある憲兵隊本部の前には、召集された一二、三人の年寄りがたむろして、おだやかなが

ら心配そうに話し合っている。家にくる鉛管工のセルヴェ親方は六三歳だが、五〇の坂を越えたパン屋のクロシエと同じく出征する〔……〕

「ヒトラーが粉碎されて、ナチ政府がドイツから根絶やしにされないうちは、もはやヨーロッパに平和の戻ることがありえないのは明白だ〔……〕」

「宣戦布告が——あるいはより正確には戦争状態布告が——ドイツ軍部隊のポーランド国土外への呼び戻しが行われたのち、ヒトラーから交渉をかちとろうと最後の努力が払われたのち——イギリスでは九月三日日曜日午前一時以降——フランスでは同日午後五時以降——発せられた。ダラデイエ首相のフランスへの呼びかけをラジオで聞く。彼は悲しげだが落ち着いている。戸外では雷鳴が轟き、そして数瞬間のちには停電。とても重苦しい。」

九月三日、ロマン・ロランはダラデイエ首相に手紙を書き送って首相を支持する意志を表明した。首相が「フランスへの呼びかけ」のなかで、ドイツの民衆にはなんら憎しみを抱いてはいないと表明したあとのことだった

から、ロランとしてはそれだけ自然な気持ちで（平和の老戦闘員）として首相を支持すると明言できたのだ。彼は首相にこう書き送ったのだ。——「自由は人類のもっとも貴重な共通の宝であります。わたしたちは人類のためにこそ、それを防衛するのです。人類が、それを救えるよう、わたしたちを手助けしてくれますように！」

九月七日、ダラデイエはロランに電話して、その手紙を受け取ったむね伝えてよこした。

唐突ですが、ここで新発表日記の紹介の筆を措きます。なにぶんにも千ページを越える大著ですから、長くなりすぎるので、本邦にはその刊行を引き受ける出版社は得られないかもしれません。それでもとにかく、せめて本誌の読者には、フランスでこういう重要な日記が世に出ただけでも知ってほしいと思いいった次第です。

付記——私事にわたることですが、筆者は今年（二〇一三年）の正月にパリの「リュンヌ」書店でこの『ヴェズレー日記』を入手しました。サンジェルマン・デ・ブ

レ教会の真向かいにある、歴史的に有名なこの書店は、今もパリ文化の中心であるようでした。この店へ行けば、フランスの最近の出版事情を一目で見渡すことができます。フランスの出版界のショーウィンドーと言つてよいでしょう。

『ヴェズレー日記』は、その書店のよく目立つ売り場に平積みしてあつたのです。重厚な本ですから、すぐには読み通すわけにいきません。それでも拾い読みしただけで、これは『ユニテ』誌の読者に急いで紹介すべきだと気づきました。連載中の「『最後の扉へ』……」をあえて一時休載させていただいて、すぐさまこの大切なニュースをお伝えします。

このところ、ロマン・ロランから読書心が遠ざかつているような感がありました。しかし、ロランの母国フランスで、この立派な本が晴れ晴れしく並べてあつたのです。一読者のわたし自身にとつても、これはまたとないお年玉となりました。

(成蹊大学名誉教授・仏文学)

## ロマン・ロラン研究に新たな息吹き

二〇二二年暮れ、フランスから嬉しいニュースが飛び込んで来た。ロマン・ロランが戦時下に綴った記録が『ヴェズレー日誌一九三八―一九四四』と題し、ジャン・ラコストの編集・解説入りで Bateilha 社から刊行されたのだ。未公開資料を含む千ページを超える大作に、『ル・モンド』紙や『ラ・カンゼーヌ・リテレル』誌などの主力メディアは、好意的な批評を載せ、偉大な思想家の半生と功績に新たな視線を向けている。示唆に富む幾つかの記事から、ロマン・ロラン再考の可能性を探ってみたい。

### ロマン・ロラン像

まず、各紙面が、偉大な思想家の半生を年譜と共に改めて紹介していることが興味深い。ロランの死後七〇年近くが経過し、第二次世界大戦後、その著作が忘却の彼方に追いやられていたことを実感させるからだ。同時に、二一世紀の読者に向けたロラン像を垣間見ることができ、彼の代表作として、一九〇四年から一九二二年に亘って巻を重ねた小説『ジャン・クリストフ』と一九一五年にジュネーブで刊行された『戦いを超えて』が挙げられる。功績としては、ロランがノーベル賞を受賞し世界中に熱狂的な読者を得たことやトルストイ、ガンジー、フロイト、リヒャルト・シュトラウス、ツバイクなど世界

シツシユ 由紀子

各国の著名人と膨大な書簡を交わし各国の要人と会談したことなど、栄光の日々にあつた彼の影響力が、いわゆる作家の域を超えていたことが再認識される。

翻つて、現在、各地の「ロマン・ロラン通り」や「ロマン・ロラン高校」という名称に名を残す以外に、彼の作品が読まれなくなったのはなぜかという疑問に至るわけだが、その答えとして、『ル・モンド』紙は、彼が「時代」とあまりにもぴつたりと合致していたからだと述べている。ロランはヨーロッパ民衆の統一を希求し、平和(反戦)主義を唱える。全体主義の台頭を恐れソ連共産主義に接近するが、独ソ不可侵条約締結後に決別する。その後、徹底した反ナチズムの立場から、対独宣戦布告に際してダラディエ首相に支持表明の書簡を送り(これが彼の最後の公の行為となつた)平和主義者たちと袂を分かつ。ロランは思想の変遷を恐れず、二つの大戦に翻弄された動乱の時代と密着していた。それが災いして、時代の移ろいと共に「大戦のブラックホールに吸い込まれていった」というのだ。

#### ロランをめぐる憶測

ロマン・ロランが一九四四年十二月三〇日、終戦四ヶ月前に帰らぬ人となると、未亡人マリイと妹のマドレーヌはロランの日誌を封印する。ジャン・ラコストは、その理由について、二人はロランとソ連共産主義の關係が論争になることを避けたかつたのではないかと推測している。様々な憶測が囁かれるようになったのは、二〇〇〇年に国立図書館所蔵資料が公開されてからだ。例えば、ロランは「ドイツ傀儡政権(ペタン)を支持していた」とか「反ユダヤ主義だった」というもので、それを窺わせる記述があると言われるようになったのだ。

しかし、ラコストは、ロランが対独協力政策を一切受け入れなかつたことや、対ユダヤ人政策を激しく非難していたこと、また、独ソ不可侵条約(一九三九年八月)以降、彼が共産党とはつきりと距離を置いていることは明確であるとし、「この日記以上にロランを正当化するものはない」と、肉親の配慮が逆に彼に対する誤解を助長してきたことを悔やんでいる。

## 読み物としての魅力

一九三八年、スイスから故郷ヴェズレーに戻ったロランは、沈黙を守りながらあらゆることを手帳に書き留めていく。彼の愛したブルゴーニュの田園風景を彩る空や丘陵・庭・鳥たち・動物たちの姿と共にヴェズレーの日常が描かれる。村の農民、パン職人や大聖堂の首席司祭など様々な人間も登場する。村の密告者や、対独協力に傾く旧友アルフォンス・ド・シャトーブリアン(Chateaubriant)たちの言動を嘆く。一方、ポール・クローデル、ジャン・ゲエノ、ニコライ・ベルジャエフなど晴れやかな人物も登場する。

ジャン・ラコストは、ロランは言葉のレベルを自在に使い分けながら、宇宙的な歴史観と日常の悲喜劇を同時に語ることができるとし、「高揚した場面では、シャトーブリアン (F.R. de Chateaubriand) の『墓の彼方の回想』を彷彿させる」と、述べている。

『ル・モンド』紙では、「再び見出された光」というタイトルを始め、「胸を抉られる深遠な洞察力」「現実への飽くなき執着」などの表現が見られる。そして、自ら行

動できぬ身となった年老いた思想家は、書き留めることで時代の証人になろうとした。それは未来への投企であり、尊厳なき時代に人間の尊厳にできる唯一の貢献であったと再評価している。

『ラ・カンゼーヌ』誌は、ロラン夫妻とクローデルとの関係に特別な価値を見出している。また、ロランの手記の小説的な魅力に触れ、クローデルが、ドイツ占領下に愛する二人の女性をロランに託した逸話を披露している。ロランは、この二人を一九四〇年からヴェズレーの家に住まわすのだが、その内一人は、若き中国領事だったクローデルが、一九〇〇年に大型客船上で出会い恋焦がれた人妻ロザリーだった。彼は、『真昼に分かつ』や『婦子の靴』で彼女を讃えている。もう一人は、彼が彼女との間に儲けながら一九二〇年まで会うことのなかった娘のルイーゼのことだ。

## 甦ったロマン・ロラン

作家や芸術家の死後、その名声が薄れて評価が曖昧になることはよくある。フランス語では、「煉獄」

purgatoireに留まる」と言うのだが、ロマン・ロランは、今、まさに、ここを抜け出そうとしていると言えないか。現時点では、日誌はフランス語版のみだが、これまで、研究者が事前に許可を取ってから国立図書館で閲覧していた資料が、解説付きで読めるようになったということは、ロマン・ロランの生の言葉に触れるための大きな助けになることは確かだ。特に、彼の元を訪れた日本人客とのやりとりについては、『ユニテ』誌上でも度々言及されてきた。今後は、その辺りをより詳細に知ることが出来るだろう。

ヴェズレーの風を知る者も知らぬ者も、ロマン・ロランの胸に飛び込むことができる。昔、有名・無名を問わぬ多くの人々がそうしたように。

(1)ジャン・ラコストはフランスの哲学者・作家・ドイツ専門家。ニーチェ、エルンスト・カッシーラー、ヴァルター・ベンヤミンらの翻訳を始めゲーテに関するエッセイやロマン・ロランに関する論考や講演多数。文字通りロラン研究の第一人者である。

(ロマン・ロラン研究所評議員／通訳・翻訳)

設立者 宮本正清 没後三〇年によせて  
「鐘を聴け」 宮本正清先生の詩と歌曲

西 垣 正 信

いつごろから宮本正清先生の「ことば」が私のなかに漂いはじめたのかは思い出せません。小学校の図書室で読んだ『ジャン・クリストフ物語』なのか、それともそれは教科書で読んだその断片のほうが先だったのか？『ジャン・クリストフ物語』を図書室で読みふけた時、それが音楽の仕事への強い憧れをはじめて抱いた瞬間でした。その時すでに、自分の小さな体はその憧れの方向に静かに向けられていたようです。

その後、高校生の私は音楽の勉強のためにフランスに渡る際、当時の煩雑なさまざまな書類を揃えることができず、まったく面識もない宮本先生のお宅を訪ねました。私は先生が『ジャン・クリストフ物語』の作者とは気が

ついていません。思い上がりと自意識に手足をつけたような若者の将来のためにさえ、先生は立派な推薦状をかいてくださいました。そのお蔭で必要な書類を揃えることができフランスに留学できました。その推薦状をもって親友の大東祥孝君（京都大学名誉教授）とともにいそいそと神戸のフランス領事館に向かったことを昨日のように思い出します。

先生に署名をしていただいた詩集『生命の歌』をフランスに留学中にもなんども読み返し、美しい日本語に誇りを持ちました。詩集は時折に孤独な音楽留学生へのいちばんの励ましでした。

留學中に師の一人であったオルガニスト、ピエール・コシユロー先生の手伝いでパリのノートルダム寺院の柱の陰で演奏録音をしました。作品はゼザール・フランクのオラトリオ『山上の垂訓』で、指揮は二〇世紀に同曲をはじめて再演したアラン先生でした。その当時はまだロランの『魅せられたる魂』を私は読んではいなかったのです。後に、オディロン・ルドンの絵『山上の垂訓』を見て納得し、宮本先生訳の『魅せられたる魂』のうつくしい場面、母と息子がこの曲の演奏を教会で共に聞く場面を、ノートルダムの柱の陰で録音していた自分の姿と重ねて、特別な情感を抱きます。フランクのパリの墓はルドンの弟によって設計されました。

私が二〇〇八年から京都文化博物館ホールで「クリスマスコンサート」と称して毎年コンサートをもち機会を得た時、その会の課題をバッハと宮本先生の詩を紹介することとしました。ただいたいた御恩を返せるとはとても思わないことですが、形だけの孝行の真似です。

先生の詩につけられた歌曲としては、著名で親しまれ

ている作曲家なかだよしな中田喜直先生の一九五〇年の一連の名作があります。「未知の扉」「秋」「彼方にはあらしが」が中田喜直全集に収録されています。歌曲として「未知の扉」はよく知られていて、美しいものです。私は中田先生作曲、宮本先生詩による「秋」は全ての日本語の歌曲のなかでも、詩と音楽が渾然としたとりわけ美しいものだと思えます。

二〇年ほどまえに先生のこの詩「秋」をテーマとして私が作曲をしたことがあります。クラリネットと二台のハープのためにセリーの様式で書き、大阪の帝人ホールで初演しました。しかし、作品としては中田先生の「秋」には遠く及ばず破棄しました。中田先生の三つの歌曲を私の専門であるギター伴奏に編曲してカウンターテナーの岡田孝氏と京都の前出の会で上演しました。本番を演奏しながらも、私は詩と音楽の美しさに感嘆していました。宮本先生の詩にはヴェルレーヌの作品のような音楽のリズムと抑揚があります。



を聴け」は私もいずれ歌曲に書きたいと思っていた詩だったのです。倉敷大原美術館にルドンの作品「鐘楼守り」があります。私はその絵から打ち鳴らされる鐘の音を聴くためによく訪れます。その絵と長編『ジャン・クリストフ』の冒頭で描写される長く美しい鐘の音と生命が同化する描写、そして宮本先生の鐘の詩、その三枚のタブローが重なりあつて、私には深い一つの作品となります。橋爪氏は美しい歌曲を書いてくれました（譜例二）。ことはが世代を越えて、「音」として生きています。

私の仕事である演奏の直前には、心を整えるために、挿し絵に彩られた本を前に小学校の図書室にいる自分に戻ろうと努めます。音楽家は音楽と詩によって自分の肉体の輪郭を得ます。その生きかたを教示していただいた宮本先生に感謝します。

（ギター奏者・作曲家）

## いただいたフランス語の手紙

井土真杉

一九七六年六月、宮本正清先生からいただいたお手紙はフランス語で書かれていた。

ロマン・ロランにあげられていた京都での学生時代、『魅せられたる魂』の名訳者として敬意を抱いていた先生のお宅にうかがって卒論のテーマについて相談に乗っていただいたり、また私の郷里の高校で講演をお願いしたこともあった。それ以来二〇年近いご無沙汰のあとのことである。当時バりに医学留学中だった兄を頼って初めて訪仏する計画を立てたのだが、就職後は疎遠になっていたとはいえ、「人生の師」と仰いでいたロランの墓参りだけは是非この機会に果たそうと考え、不案内な現地での手はずについて、また厚かましく宮本先生に伺い

を立てた。お手紙はそこご返事で、二通の紹介状が同封されている。

フランス人の筆跡というものは概して悪筆というか、判読に難渋するものが多いが、その点、先生の肉筆フランス文は明瞭で美しくさえあった。

なぜフランス語だったのか？ これから初めてフランスへ渡る私に少しでもフランス語に慣れさせようとのご配慮か、あるいは先生ご自身、日本語でくどくど書くよりフランス語のほうがお楽だったのかもしれない。

文面は簡にして明、ロラン夫人とクラムシー市の助役ギボン氏を紹介してあげるから、パリに着いたらすぐ電話して訪問の約束を取り付けること、向こうではみんな

Kyoto, le 17 juin 76.  
 Cher ami Izumi,  
 Je n'ai pas le temps de vous écrire  
 longuement. Je m'empresse, donc, de vous  
 envoyer ci-jointes deux cartes de moi-même  
 en vous recommandant à Mme Marie Rouxin  
 Rolland et à M. Guipon, Adjoint au Maire de  
 Clamecy. Téléphonnez à Mme R.R. à l'avance  
 pour fixer votre visite chez elle à Paris.  
 Son appartement se trouve à l'entresol 4 =  
 75. Quant à M. Guipon, essayez de le pré-  
 venir votre arrivée exacte à Clamecy.  
 Sinon, vous pouvez manquer à tout,  
 car à Paris tout le monde est plus occupé  
 que chez nous.  
 Amicalement à vous,  
 M. Higuchi  
 P.S. M. Guipon habite à Vezelay, chez Mme R.R.,  
 mais se trouve à Clamecy.

忙しいから、というものだった。こうして私はロランの墓参のみならず、モンバルナス大通り八六の研究所でロラン夫人にお会いでき、またギボンさんの懇切な案内でロランの生家や記念館なども訪ねるといふ望外の幸せを得たのであった。

先生からのお手紙には別便で追伸があり、せっかくパリに行つたらサント・シャベルの美しいステンドグラスだけは必ず観てくるように、という「命令」。墓参から帰つて後、お言葉通りノートルダム近くの裁判所の敷

地内にあるこの古い王家の壮麗な礼拝堂に参上した私は、またいたく感動した。

ところが後日、ロラン全集のなかの「日本人への手紙」をめくつていたら、ロランが上田秋夫氏や片山敏彦氏らに宛てた手紙のなかで、同様にサント・シャベル拝観を熱心に勧めているくだりを見つけ、宮本先生も最初はきつとロランから教わつたに違いないと微笑ましく思つたものだ。

これまで幾度かパリを訪れる機会があるごとに、私はそこに詣でて一六基の見事なステンドグラスを通した光を浴びる。そして訪仏する友人知人たちにも知識を授け喜ばれる。「サント・シャベル鼻貞」として、私がロランから数えて三代目なら、彼らは四代目の曾孫といふわけか。

(ロマン・ロラン研究所評議員)

## 「日本におけるロマン・ロランの音楽」

——音楽劇<sup>オペラ</sup> 今藤政太郎作『ピエールとリュース』

宮本 エイ子

### 二〇一二年 ロマン・ロラン国際シンポジウム

テーマ 「ロマン・ロランと音楽」

時 間 十月四日、五日、六日、七日

場 所 フランス アヴァロン、クラムシー、ヴェズレー

\*各市庁舎、ロマン・ロラン芸術・歴史会館（生家）、ゼ  
ルボ美術館（終焉の家）、ジャン・クリストフセンター、  
メゾン・ジュール・ロワ、サン・マルタン教会、世界  
遺産マドレーヌ寺院など

\*行事内容

ドキュメントフィルム、映画、講演会、コンサート、パイ  
プオルガン、ピアノ演奏、朗読会、展覧会、シンポジウム

\*参加者

フランス、ドイツ、カナダ、スペイン、アメリカ、オー  
ストラリア、スイス、インド、日本などから音楽学者、  
演奏家、ロラン研究家など専門家と地元行政、団体、  
住民など延べ参加者、約一〇〇〇人

ロマン・ロラン協会（フランス）主催の国際シンポジウムは、近頃ではロラン終焉の地ヴェズレーを中心に四年に一度、十月初めに開催されます。前回の二〇〇八年は「第一次世界大戦後九〇年」のテーマが掲げられ、ピアニスト神谷郁代先生と前理事長、故・尾埜善司先生が私たちを導いてくださいました。

今回は「音楽」がテーマです。会長マルチヌ・リエジョワ夫人から「日本におけるロマン・ロランの音楽」について発表するようにとの要請が来ています。彼女の頭には三味線奏者で作曲家の今藤政太郎先生の『ピエールとリュース』の音楽劇<sup>オペラ</sup>があるようです。今藤先生は五年前、メディアで華やかに喧伝された市川団十郎率いる

歌舞伎公演に三味線奏者としてパリ・オペラ座（ガルニエ）の舞台に立たれたのです。先生は『ピエールとリュース』をすでに作曲されていましてので、ロマン・ロラン協会会長リエジヨワ夫人に敬意を表して入手困難な公演招待券をご用意くださいました。夫人の受けた日本の伝統芸能の新鮮な印象は、彼の『ピエールとリュース』に一層関心を掻き立てたようです。そのようなわけで、本来ならば今藤先生がご参加くださるのが最適なのですが、理事長の西成勝好氏も十月四―七日という日程は都合がつかず、結局、私をご報告することになったのです。

思えば、宮本正清を講師とする「ヨーロッパ文学の旅」に私も参加させてもらい、ロラン終焉の地である、かのヴェズレーの丘に佇む晩年の家を初めて扉越しに見たのは、遠く一九六八年のことでした。それ以来四四年、マリ―夫人や正清に連れられ、この地に触れ、尊敬と親しみを深めてまいりました。土地の人とも仲良くなりました。「ロマン・ロランの足跡」を訪ねる旅にも参加しましたが、発表者としては今回が初めてで、「孤独な旅人」

と思いきや、その不安を払拭するかのようになり、前回のようなツアー旅行でなくても個人旅行として同行してくださいという方々が現れました。「感動をもう一度」と言われて、道づれをお申し出くださったのは、前回参加された中田裕子さん、西尾順子さん、そして新たに中田さんの友人西村秀美さんの三人です。

雑務に紛れるのはいつもと同じですが、今回は挨拶用ではなく報告用原稿を持っていかねばなりません。

今藤先生が『ピエールとリュース』を作曲された経緯はすでにご講演いただき、二〇〇八年、『ユニテ』三五号に収録されておりますが、外国の方々にはどのようにお伝えすればいいでしょうか。

ロマン・ロランの短編小説、第一次世界大戦下の純愛物語が死で結末する『ピエールとリュース』を日本人の邦楽家が音楽に表現したかったその背景をも想起したいと思います。

数年前「平積み大作戦」というNHK、BS放送の「本の紹介番組」のなかで『ピエールとリュース』が取り上げられました。たまたまご覧になっていた今藤先生

は、学生時代に読んだ思い出が彷彿として蘇り、「よし、これ作曲しよう」という思いに駆られたのでした。

六〇余年前、戦争の悲劇は日本中を覆いつくし、国民は苦難にさらされました。東京は焼け野が原となり、人類史上初めて広島、長崎の原爆投下を受け、敗戦となりました。戦後、軍国主義から一転、民主主義に転換され、国民は飢えたように、ことのほか若者は、砂漠に水の如く海外の書物をむさぼり読みました。特にロマン・ロランは若者に受け入れられました。『ピエールとリュース』もその一つで「また逢う日まで」のタイトルで映画にもなったほです。

今藤青年の鮮烈な思いも五〇年の時を経て、戦争の犠牲になった民族も超えたすべての人々の魂を鎮める鎮魂歌<sup>レクイエム</sup>として音楽劇に結実させたのです。もう一つ加えたいことは、歌舞伎のなかでお仕事をしてこられた先生は、日本のシェイクスピアともいわれる近松門左衛門の悲しくも美しい結末で終わる「心中もの」にある恋の美意識を『ピエールとリュース』にも通じると考えられました。ピエールの中産階級、リュースの毎日の生活に

も困窮する階級、その格差を結婚の障害としてとらえ、心中をして恋の浄化、成就とみなされる「心中死」とも解釈されました。そのことも「今藤視点」として指摘させていただきます。

二〇〇六年、東京紀尾井ホールで初演されました使用楽器はすべて和楽器ですので、それらを今藤先生のポートレートとともに画像で示しながら、作品の一部分のメロディーを流し、レポートの締めくくりといたしました。画像は賛助会員木下洋美さん、そして研究所でのフランス語のお仕事はいつもシツシユさんご夫妻にしていたでいており、今回もテキストは彼らのお力をいただきました。私の報告はリエジヨワ会長の過分なご配慮から、発表者二人ほどのシンポジウム幕開け<sup>オープニング</sup>にしていたいただき、早くに重荷から解放されました。今藤政太郎先生はもとより、各位のご厚意に心から感謝申し上げる次第です。



ヴェズレー入り口の  
2012年ロマン・ロラン国際デーの  
横断幕



ブルゴーニュ地方標識

ロマン・ロラン 芸術歴史会館  
陳列ケース



「ロマン・ロラン伝」の著者デエシヤトレ氏  
リエジョワ会長とタスマニア島から参加の  
ローズマリーさんたちと

ジャン・クリストフセンターでの  
リエジョワ会長挨拶



クラムシーにて  
中央：「ヴェズレー日記」編者 ラコスト氏  
左：俳優 オリヴィエ氏  
右：宮本エイ子

ブレーヴのリエジョワ会長宅入口



ブレーヴ  
ロランのお墓のある入口

## 再びヴェズレーへ

中田 裕子

私たちは、二〇〇八年の「ロマン・ロランの足跡を訪ねて」のツアーと同じ十月二日に関西空港からパリへ向かった。列車でクラムシーへ。

クラムシー駅で、ロマン・ロラン協会会長リエジョワ夫妻、前回ホームステイさせていただいたミドンさんやデルボーさんたちの、あたたかい気持ちの伝わってくる笑顔とハグで迎えられた。ヴェズレーへの途中の車窓から、四年前に訪れた時から私の頭から消えなかつたヴェズレーの丘が一瞬見えたときは、懐かしさと再びヴェズレーに来たという実感が胸がいっぱいになった。

その夜、『ロマン・ロラン伝』を執筆されたベルナル・デュシャトレ先生を囲んでヴェズレーのレストラン

でディナー、ここに集う皆さんとはずっとお友達だったような親しい和やかな雰囲気、言葉が通じなくても気持ちには伝わってくる。

こうして宮本さんや西尾さんを残して私と西村さんの三泊四日のヴェズレーの滞在が始まった。

アバロン、クラムシー、ヴェズレーの町の教会や市役所などで、ロマン・ロランについての発表や討議だけではなく、映画、オーケストラ、パイプオルガンやピアノ演奏、舞台俳優による表情豊かな抑揚の効いた朗読などが催され、楽しいシンポジウムだった。

五日の宮本エイ子さんの発表のときは、皆さんが集中して聴いている凜とした空気が伝わってきて、日本での活

動にすぐ興味をもってくれているのだと嬉しくなった。

サント・マドレーヌ大聖堂までのゆるやかな坂道を、ロラン・ロランが晩年を過ごした家やワイン、蜂蜜、衣料品、みやげ物などのお店を見ながら散策するのも興味深く楽しいものだった。

散策途中の店先で透き通るような美しいブルーのセーターを見つけた。宮本さんの通訳によると（お店の人身がヴェズレーで飼育している羊から作った毛糸を染め、しかも手編みで作られた品）なのだそうだ。ロランの青かったという瞳とも重なり、無性に欲しくなり、ヴェズレーの記念の品にと求めた。

ブレーヴのロランのお墓参りやクラムシーのロマン・ロラン・ミュージアムにも案内してもらった。このミュージアムで力強くやさしいロランの声を再び聞くことができ感動した。

またリエジヨワ会長やデルボーさん宅のランチに招待され、地域の方々と交流ができた。ここヴェズレーで出会った人たちは、大らかで話好き、食欲旺盛ですごくエネルギーギッシュで、私には『コラ・ブルニョン』を連想さ

せた。

変化に富んだ色々な体験をさせていただいた素敵な毎日だったから、私のヴェズレー滞在はあつという間に過ぎ去ってしまった。

ロランの部屋の窓の前に広がっていた美しい丘陵の大パノラマと今も残されている彼が弾いたピアノ、ここに住んでいた頃のロランは、ロシアに家族を残しているマリイ夫人への配慮から共産党や第二次世界大戦についての意見が述べられず、友人や信仰の問題も抱え、その上自身の健康も最悪であり、とても困難な精神状態だったと思われる。けれども、最後に倒れるまで書く仕事は止めなかったと聞く。どこから、この力は生まれてきたのだろう？

ヴェズレーで買ったお気に入りのブルーのセーターの暖かさと共に、ロマン・ロランやヴェズレーで出会ったたかくもてなしてくださった人たちのことを懐かしく思い出している。

（評議員）

## 白い大きな手

西尾 順子

ヴェズレーに五泊した今回の旅は、「ロマン・ロランの足跡を訪ねて」スイスまでも足を伸ばした四年前のツアーとはまるで様相の違ったものでした。前回も国際シンポジウムが核でしたが有志の参加ということで、私はレセプションには出席しておもてなしいただいたのですが、後は観光に専念し、初めて目にする風景や文物に心を奪われて過ごしました。

ところが今回は「国際ロマン・ロラン・デー」と銘打たれた一〇月四日から七日までの行事への参加が目的だったのです。のんきな私はただ「フランスへ、もう一度ヴェズレーへ、パリへ行ける」という嬉しさに胸を高鳴らせて出発の日を待ちました。兄と親友を立て続けに

喪うという現実からしばらく逃れられるという個人的な事情もありました。

一〇月三日、パリ、ベルシー駅から電車に乗って二時間四〇分でクラムシー駅に着くと、四年前にお世話になったミドン夫人やデルボー氏の懐かしいお顔がありました。思いがいつぱい溢れているのにそれを言葉で十分に表せないもどかしさ、つらさをこれ以後、常にかみしめることになりました。

一〇月四日のお昼に、ロマン・ロラン協会会長のマダム・リエジョワのブレーヴのお宅に招待されて邸宅のあちこちを見せていただき、彼女の腕を振るったご馳走を味わうという幸せに恵まれました。ハンサムなご主人と

長女のお婿さん（オリヴィエ、後ほど登場します）に  
おいしいワインやデザートも勧められ、夢見心地のひと  
きを過ごしました。食後、近くのロランのお墓に詣で、  
その辺りにも四年の時間が流れたことを実感しました。  
その後、迎えたアヴァロンでの開会行事——午後六時か  
ら始まり、最終の映画（一七世紀の音楽家を描いたもの  
と後で聞きました）が、まるで理解不能）が終わってホテ  
ルに帰ると真夜中になっていました。

五日から「ロマン・ロランと音楽」をテーマにしたシ  
ンポジウムが始まりました。ヨーロッパはもとよりアメ  
リカ、オーストラリアからも研究者が集まりました。タ  
スマニア大学のローズマリーさんと私たちは親しくなり、  
よく行動を共にしました。日本語で聞いても難しい内容  
がフランス語で発表されるのですから、宮本さんを除く  
私たち三人に理解できるわけがありません。結局宮本さ  
んとローズマリーさんの発表以外は、会場を抜け出して  
いたことを白状します。

言葉の壁は非常に厚かったのですが、やはり音楽は違  
いました。五日の夜のクラムシーのサン・マルタン教会

でのパイプオルガンの演奏会では、教会の高い天井から  
降ってくる音に時を忘れて心地良く身を包まれていま  
した。

そして圧巻が一〇月六日午後九時から始まった「ピア  
ノと朗読」。舞台はサント・マドレーヌ大聖堂で、四年  
前の神谷郁代先生のコンサートをまざまざと思い出し  
ました。なんと前日に会長宅でお世話になったオリヴィエ  
が黒づくめの服装で登場——彼はプロの舞台俳優だった  
のです。ロマン・ロランの文章の抜粋の朗読を私は固唾  
を呑んで待ちました。ヘンデル、ベートーヴェン、ド  
ビュッシー、リヒャルト・シュトラウス、バッハ、ポー  
ル・デュパンというロランに深いつながりのある作曲家  
のピアノ曲が演奏され、間に挿入する形でヘンデルや  
ベートーヴェンについてのロランの文章が読まれました。  
論文調の難しい文章は意味が分からず、ただオリヴィエ  
の張りのある伸びやかな声が耳に快く響きました。「明  
晰でないものはフランス語ではない」と以前聞いたのを  
思い出しました。

最後のほうに『ジャン・クリストフ』の「広場の市」、

そして「曙」。叔父ゴットフリードと少年クリストフとの有名な対話の部分です。オリヴィエはことさらに子供の声を作ることもなく、自然にクリストフになっていました。魂の底から出てくるようなゴットフリードの深い声音を私は目をつぶって味わいました。何度も読み返してほとんど暗誦できるほどになっていたので、一語一語フランス語を聴きながらこれが本物だと得心しました。目を開けるとオリヴィエは片手に原稿を持ち、片腕をしながらやかに動かしていました。照明に白く浮き上がった手は生き物のように見えました。「大きな手」と私は心の中でつぶやき、ふとこれに似た手を見たことを思い出しました。ロマネスク様式の傑作として有名な、この大聖堂の玄関の上にある彫刻です。顔を正面に向け体を少し左にひねったクリストの両手が左右に広げられ、その先から使徒たちの頭に精霊が降り注がれるシーンです。左手の先は壊されていて、残された右手の大きさが強く目に焼き付けられました。オリヴィエは聴衆にロマン・ロランの伝えたいことを、彼の声に乗せて降り注いでくれたのです。私は感動で涙ぐみました。聴けてよかったと心

から思いました。この旅行のクライマックスでした。今回の催しに日本から参加した私たちを歓迎してくださった関係者の方々も皆、大きな手をしておられた印象があります。言葉も考え方も異なる者を受け入れる広さを持った優れた人たちに会えたことは、本当に幸せなことでした。私の目の奥で当分の間、白い大きな手が旋回しているような気がします。

## ロマン・ロラン研究所便り

ロマン・ロラン研究所の一般財団法人化について

西 成 勝 好

この数年、我が国において学会その他各種団体の公式登録が要請され、ロマン・ロラン研究所も一般財団法人として登録申請が認可されました。設立時の趣意に従って定款とか諸規則を見直し、若干訂正しなければなりませんでしたが、これまで続けてきた活動が著しく変わるわけではありません。われわれの研究所はロマン・ロランの作品に感動し、生き方に共感したものが講演会、読書会、音楽会、展示会などを公開で、広く参加を呼び掛けて開催してきたものでありますから、暴利をむさぼってでたらめな経理をしていたような団体とは異なり、一般財団法人として認可されたことは当然であります。

役員も無報酬でボランティア活動のようなものであり

ますから、行きとどかないことも多いと存じますが、会員諸氏の熱心な参加により、一昨年には六〇周年を迎えまして、今後さらなる発展を目指しております。

フランスのロマン・ロラン協会と連携して国際シンポジウムにも積極的に参加してきました。今後もフランスはじめ、ロランを通じて、ヨーロッパ各国、インド、中国その他の友人たちとも交流を深めていく所存です。

法人化が無事に達成したことを契機に、会員諸氏には、一層の積極的参加をお願いしたく存じます。

なお、行事のご案内はホームページでご案内いたしておりますので、ご覧いただきますようお願いいたします。

(ロマン・ロラン研究所代表理事)

# 財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生漕つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頽廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

## ◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

- 講演会
- 読書会・研究会
- 機関誌「ユニテ」発行

## ◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

- ロマン・ロランの著作に感動、また
- 彼の周辺の芸術家たちに興味、
- あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
- いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。
- 特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。
- 会員①一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

# ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	5・15	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	4・20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
	11・27	苦悩のなかのインド	森本 達雄	6・9	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七二	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂弥	9・29	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
一九七三	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	11・17	ロマン・ロランとの出会いから	尾埜 善司・今江 祥智
12・18	12・18	私の人間観	末川 博	1・27	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	新村 猛
一九七四	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	6・2	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
12・5	12・5	ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫	9・26	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
			演奏…玉城 嘉子	10・26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
一九七六	7・11	ロマン・ロランとゲートル ユダヤ民族と西洋文明	南大路振一 岡本 清一	11・30	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
				一九九一	ロマン・ロランと私	松居 直
				一九九〇		
				一九七七	中国文学とロマン・ロラン	相浦 杲
				2・10		
				一九八九		

4・19	(財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル 杉田 谷道	10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子
6・4	ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ ロマン・ロランとベートーヴェン 青木やよひ	1・28	いま、ロマン・ロランを語る	尾埜 善司・今江 祥智
9・27	ロマン・ロランとデュアメル 村上 光彦	9・9	ロマン・ロランと音楽	中野 雄
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性 兵藤正之助	10・14	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ	B・デュシャトレ
11・29	初めにロマン・ロランあり 岡田 節人		ロランとフランス革命	河野 健二
一九九二			自然科学とゲーテ	岡田 節人
6・26	〈大洋感情〉と宗教の発端 岩田 慶治	12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽 ——ベートーヴェン、デュカ他作品	岡田 暁生
9・25	ロマン・ロランとイタリヤ 戸口 幸策		おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日ま で」	今江 祥智
10・30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって 鶴見 俊輔	12・24	ピアノ演奏…小坂 圭太	圭太
11・27	宮本正清 没後十年記念追悼会 ピアノ演奏…山田 忍		映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	今井 正
一九九三	静かにやさしき顔 佐々木斐夫	一九九五		
1・29	不思議な静けさ——宮本正清の世界 小尾 俊人	1・27	ロマン・ロランと日本人たち	小尾 俊人
1・29	自伝的諸作品について 佐々木斐夫	6・2	私の歩んだフランス文学の道	片岡 美智
5・24	ロマン・ロランの演劇的世界 石田 和男	11・10	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺	岡田 暁生
6・23	ガンディーとロマン・ロラン 山折 哲雄			
	『魅せられたる魂』を語る(前) 重本恵津子			

一九九六	6・14	ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫	10・30	ロマン・ロラン記念コンサート	
	11・16	レクチャーコンサート	岡田 暁生			ピアノ演奏…小坂 圭太
		ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番		11・25	ロマン・ロランと大佛次郎	レクチャー…岡田 暁生
		ピアノ演奏…北住 淳		一九九九		村上 光彦
11・18		「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン	本山 美彦	6・11	ロランと音楽	岡田 暁生
一九九七	1・17	「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと	區 建英	12・1	「日本ロマン・ロランの友の会」五十周年記念	園田 高弘
		魯迅			園田高弘「ベートーヴェンを弾く」	
	6・6	わが青春と一生	岩淵龍太郎	二〇〇〇	ロマン・ロランとインドの精神	森本 達雄
	9・19	ロマン・ロランと結核の時代	福田 真人	10・13	ロマン・ロラン没後五十五年と日本	佐々木斐夫
	10・4	ピアノとチェロのための夕べ				
		ピアノ演奏…北住 淳		二〇〇一		
		ロマン・ロラン記念コンサート		2・23	ロマン・ロランと《老いの豊かさ》	青木やよひ
		チェロ演奏…小川剛一郎			シンポジウム	今江 祥智
一九九八						尾埜 善司
	6・8	ロマン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫	6・23	(財)ロマン・ロラン研究所設立三十周年記念	神谷 郁代
	9・25	ロマン・ロランと政治的魔術からの解放	柳父 図近		コンサート	
					神谷 郁代「ベートーヴェンを弾く」	

12・21	ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー		二〇〇四	
			5・29	『ぎょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』 朗読とおはなしの会
二〇〇二				
4・20	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ		7・16	おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子 ロマン・ロラン記念サマーコンサート 演奏…ピエール・イワノヴィッチ
11・11	ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ ロマン・ロランの後継者たち		9・11	抗日中国における中仏文化交流 中国の知識人はロマン・ロランをどのように評 価したか 内田 知行 郁子・イワノヴィッチ
二〇〇三				
4・19	ロマン・ロラン記念スプリングコンサート 演奏…ピエール・イワノヴィッチ		二〇〇五	
5・10	ロマン・ロランの作品による音楽とレコード 郁子・イワノヴィッチ		1・29	現代の法とヒューマニズム 加古二郎と瀧川事件 園部 逸夫
5・31	戦争と平和、科学を考える ピアノ演奏…沖本ひとみ フリーモ・レーヴィを語る		6・12	ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート 梅原ひまり 神谷郁代デユオ ヴァイオリン演奏…梅原ひまり ピアノ演奏…神谷 郁代
11・22	ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える ジル・ド・ジエンヌ 解説 西成 勝好 峯村 泰光		6・25	生々発展する魂 ゲートとベートーヴェンそしてロマン・ロラン 青木やよひ

- 10・29 交差する肖像  
 ロマン・ロランとクロードル  
 J・F・アンス  
 通訳 原口 研治  
 11・13 中国研究を通しての日仏交流  
 京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合  
 狩野 直禎
- 二〇〇六 戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン  
 山口 俊章  
 二〇〇八  
 3・8 『ピエールとリュース』を演出して  
 今藤政太郎
- 二〇〇七 日本におけるロマン・ロラン受容史  
 シッシユ・デイダイエ  
 通訳 シッシユ由紀子  
 6・28 中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷  
 榎本 泰子
- 1・20 琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート  
 大谷 祥子  
 9・16 前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演  
 ロマン・ロランと日本人たち  
 尾埜 善司
- 2・3 歌と朗読の会  
 豊 剛秋・増永雄記  
 10・4 ロマン・ロラン国際平和シンポジウム  
 宮本正清の詩『焼き殺されたいとし子らへ』  
 「わらい」朗読  
 尾埜 善司
- 7・21 朗読の会  
 尾埜 善司ほか会員  
 10・4 ロマン・ロランが愛したベートーヴェン  
 フランソワ・ラベット  
 ピアノ演奏…神谷 郁代
- そして『母への手紙』

二〇〇九

2・7 朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』

ピアノ演奏…岩坂富美子

朗読…下郡 由ほか

「日本・ロマン・ロランの友の会」六十周年記念

6・13 レクチャー・ギター コンサート 西垣正信

9・30 フー・ツォン ピアノリサイタル フー・ツォン

10・24 犠牲の宗教への問い 高橋 哲哉

二〇一〇

7・24 小林多喜二とロマン・ロラン―反戦・国際主義の

文学を求めて― エヴリン・オドリ

9・29―10・3

一九五三年のフランスの子供の絵特別出品(京

都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓

作品展)

10・9 ピアノリサイタル 神谷郁代

二〇一一

2・19 朗読の会 トルストイ没後一〇〇年記念『トルス

トイの生涯』『伯爵様』

会員たち

二〇一一

11・19 フロイトとロラン―災厄の後に、幻想の前で

小森謙一郎

二〇一二

1・27 『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会

―小尾俊人氏へのオマージュを込めて―京都会場

講演『ジャン・クリストフ』を読みかえして

村上 光彦

ロマン・ロランとみず書房と小尾俊人さん

守田 省吾

スピーチ フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ

3・5 朗読の会

女たちの祭典・ワークシヨップ『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ 会員たち

3・29 『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会

―小尾俊人氏へのオマージュを込めて―東京会場

琴とヴァイオリン合奏

琴…大谷 祥子 ヴァイオリン…白須 今

『春の海』 宮城道雄 作曲

『夢のあと』 フォーレ 作曲

7・28

朗読の会『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ

於 ロマン・ロラン研究所

10・20

「ロマン・ロランと賀川豊彦」

濱田 陽

## 寄贈図書

吉田矩彦氏

「東日本大震災記録」DVD三枚

井土真杉氏

1' Mémoires Albin Michel 1956

2' Colas Breugnon Albin Michel 1950

3' Les Précurseurs Albin Michel

4' Le Jeu de L'Amour et de La Mort Albin Michel

黒柳大造氏

「日本トルストイ協会報 10号」

フランス ロマン・ロラン協会

1' ロマン・ロラン協会冊子 Cahiers de Brèves no 29, 30

2' Rolland-Petit-Guiloux 5 Conférences sur Romain Rolland

Colloque—Universitaire International 17 Juin 2011

3' Romain Rolland Journal de Vézelay 1938-1944 Édition

étalée par Jean Lacoste

4' Romain Rolland Au dessus de la mêlée Petite Bibliothèque

Payot

フランス ロマン・ロラン芸術・歴史会館 クラムシー

Romain Rolland Les Pacifistes : Leurs Detracteurs :

Amour et Heine Pendant la Grande Guerre

Catalogue de l'exposition présentée à Vézelay les 4 et 5

octobre 2008

à l'occasion des Journées Internationales Romain Rolland

puis à Clamecy du 3 au 20 décembre 2008

フランス クラムシー芸術科学協会 冊子 2012 Bulletin

de la Société Scientifique et Artistique de Clamecy

Ivanovich 伊万诺夫

Romain Rolland Journal de Vézelay 1938-1944 Édition établie

par Jean Lacoste

## 十 訃報十

宮内幸子さん

長年賛助会員として講演会などによく参加くださいました。二〇一二年一月十九日、ご逝去、八七歳。「母は七月から入院しておりました。その間ずっと、『ロマン・ロラン伝』を手放さず、一日一行とか二行、目を通しておりました。母にとつて、ロマン・ロランはあがれでもあり、青春の象徴でもあったようです。…お嬢様からのお便りです。合掌。

## 短 信

\*安木由美子さん 「本とお茶 ときどき手紙」のキャッチフレーズでブックカフェ草徑庵を開設されました。中央の木の手書棚にはロマン・ロラン全集が置かれています。

「京都の研究所の支部と想っています」と、安木さん。皆様一度お訪ねを！ 営業日は毎週金曜日、土曜日。

blog <http://soukeian.blog.fc2.com/>（ブログ）確認ください。

住所 〒二三五—〇〇二一

横浜市磯子区岡村四—二〇—一五—一〇一

\*乗金瑞穂さん 画家 野見山暁治氏が戦後のパリ滞在中、知遇を得た婦人について次のように記しています。「マダムセッサの部屋の暖炉の上に、署名入りのロマン・ロランの写真が飾つてあるのを私は見た。ロランが息を引き取るまでの半年間、ロランが自分の妻をも避けて身の回りの世話を頼んだエステル・オステルバイユというハンガリー人の看護婦が彼女だったとは！」『パリ・キュリイ病院』野見山暁治著から。

\*下郡 由さん 『フランス詩と歌』斎藤磯雄著の「リラの季節」の部分を読みましたらロマン・ロランのお説が出ていましたので、なんだか親しい知り合いに逢った思

いでうれしくお伝えしたくコピーしました。私の小さな歌の世界でもロランが生きて顔を出してくれたらという思い。ロランの一八七〇年以後のフランスの音楽再興という論文が取り上げられています。

### 読書会報告

例会、原則第四土曜日 午後二時～四時

於ロマン・ロラン研究所

二〇一二年、四月二十八日、五月二十六日、六月二十三日、九月十五日、十一月二十四日。

二〇一三年、一月二十六日、二月二十三日、三月二十五日、以上八回。三〇二～三〇九回、友の会から数えると四八四回終了。テキストは、『魅せられたる魂』／母と子／エビローグ／予告する者

通年 参加総数百三十人

二〇一二年 度 賛助会員、寄付者名簿 (アルファベット順・敬称略) \*特別会員及同等寄付者

赤松 博司 安倍 道子 有馬通志子 安藤 知子	能田由紀子 岡部 素行 大川起示子 岡山 善政
シツシユ・D・由紀子 権 英子 五島 清子	奥村 一彦 奥村 令子 折田 忠温 大谷佳世子
長谷川和宏 *長谷川治清 早川工務店(早川 友一)	大谷 史朗 大谷 祥子 坂井 晃 酒井 保子
林 次郎 林 千恵子 日野三三代 *本郷美智子	坂谷 千歳 佐久間啓子 清水 憲一 佐々木雅子
福田 幸子 福田 由美 古家 和雄 石丸 啓子	志賀 鍊三 下郡 将宏 下郡 由 所司 育代
池垣 勇 今井 香子	園部 逸夫 鈴木 明子 竹内 忠雄 田間 千晶
*稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄) 石川 梢一	谷口 景子 谷口 良則 田代 輝子 田谷 里美
*伊藤 朝子 井土 真杉 井上 幸子 岩坪嘉能子	徳永 勲保 上原 栄子 植松 晃一 上西 妙子
神谷 郁代 狩野 直禎 加藤 澄子 加藤富美子	馬木 紘子 梅田 菊代 梅原 ふさ 氏家 玲子
小張 芳男 木下 洋美 清原 章夫 黒柳 大造	和田 義之 八木美佐子 安木由美子 山口 俊章
松田有美子 馬淵 岳大 峯村 泰光 *宮本エイ子	山本 和枝 山岸 哲男 山下 雅子 柳父 閑近
宮内 幸子 森本 達雄 森内富美子 *森内依理子	柳田 基
村上 光彦 村上 葉 村松 敏 村田まち子	
村山香代子 永易 秀夫 永田 和子 仲井 道子	
中村 信子 中田 裕子 西村 秀美 西村七兵衛	
*西成 勝好 西尾 順子 野村 庄吾 乗金 瑞穂	

## 『ユニテ』編集を終えて

ユニテ40号をやつと送り出すことが出来ました。

今回の40号に濱田陽さんの論文「ロマン・ロランと賀川豊彦」を巻頭に飾れたことを嬉しく思います。この原稿は昨年研究所でなさいました講演の草稿を基にしたものです。

濱田さんは「ロランの自由は、それによって私たちが支えられるものではなく、私たちが守り、育てるもの」と説かれています。

そして、ロランの自由や精神と響きあい、共振するものとして賀川豊彦の自由な意思による協同や兄弟愛ととりあげ、両者は共振には至らなかつたが、今後の重要な課題であろうと指摘されています。

今の若い人たちの中で、賀川豊彦を知る人は少なくなっていますが、知る人ぞ知る人で神戸のスラムに住み社会活動した作家であり、キリスト教兄弟愛という心情の中で生きた人でした。私事で恐縮ですが、少年の頃一度だけですが賀川豊彦さんとお会いしたことがあります。

福井大震災の時でした。当時旧制中学四年生で金沢に住

んでいましたが、隣県へ救援隊として出かけた折でした。我々ボランティアは教会の庭にテントを張って活動していました。そこへ賀川豊彦さんが集められた救援物資とともに現れたのに驚きました。夜は我々にも話してくださいました。この人の名声は中学生の僕でも知っていましたし、初めて目の前に現われた有名人でした。また、こんな場ですので先生のフランクな面も感じる事ができましたように思います。

私は濱田さんの論文を拝見しながら、当時を想起し少なからぬ興奮を覚えています。

私だけでなく、この論文には多くの新しい視点や指摘があり、今後の先生のご活躍を期待いたします。

(野村庄吾)

「ロランの自由は、それに私たちが支えられるものでなく、私たちが守り、育てるもの」——本誌3ページにある濱田陽先生のことばを、あらためてくり返したいと思います。そしてそれに呼応するかのよう、本誌には、

昨年フランスではじめて公刊されたロランの『ヴェズレー日記』を私たちがどう読むべきかを考える二篇、および、私たちにとつての二一世紀のロランを探る「ロマン・ロラン国際シンポジウム」への参加と交流の報告三篇を掲載することができました。

(守田省吾)

宮本正清が逝いて三〇年、その節目の年に、フランスで『ヴェズレー日記』が公刊されたことに感慨深いものがあります。宮本は日本における「ロラン全集」にただ一つ欠けているのはこの日記であるとの信念で、生前、ロラン夫人に日本の忠実な読者に公開することを折に触れ訴え続けておりました。『ユニテ』31号の拙稿でも触れさせていただきました。本国フランスのル・モンド紙はじめメディアの素早い反応はロラン復権への兆しと期待し、全文を本誌にご紹介するべきだと考えシツシユ由紀子さんに翻訳をお願いし、ゲラ化しておりました。残念ながら著作権の懸念が生じ、急きよ読後感に変更していただきました。

それぞれのテーマでお願いした各氏からも玉稿をお寄

せいただきました。私たちの活動の集約であり、絆でもある『ユニテ』、その刊行にご協力賜りましたおひとりおひとりに心からの感謝を申し上げます。日本では今やロランの読者数の激減で出版が叶いません。人間ロランの神髄は、一言一句、玉のように光って現代に生きる私たちを照らしています。これを紙でなく、今の革命的ツールを使つて知らしめなければとの思いは、読書会ですつとも話題になります。皆様のご支援を願うものです。

(宮本エイ子)

### 編集部

野村 庄吾	守田 省吾
西村七兵衛	中田 裕子
	宮本エイ子

ユニテ 第四十号

発行日 二〇一三年四月三十日

発行者 一般財団法人

ロマン・ロラン研究所  
理事長 西成 勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株)北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>  
E-mail [rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp](mailto:rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp)

# U N I T É

## Sommaire

Romain Rolland et Toyohiko Kagawa	Yo HAMADA
Réflexions sur la conférence: 《Romain Rolland et Toyohiko Kagawa》	Kazuhiko OKUMURA
À propos du 《Journal de Vézelay》	Mitsuhiko MURAKAMI
Un nouveau souffle pour la recherche rollandienne	Yukiko CHICHE
À la mémoire de Masakiyo MIYAMOTO, fondateur de l'Institut RR de Kyoto, disparu il y a 30 ans À propos de 《Entends la cloche》, poème et chant	Masanobu NISHIGAKI
Souvenir d'une lettre écrite en français	Masugi IZUTI
Rapports sur les Journées internationales Romain Rolland 2012 : L'opéra Pierre et Luce, réalisation de Masataro Imafuji, maître de Shamisen	Eiko MIYAMOTO
Revoir mon Vézelay	Hiroko NAKATA
La grande main blanche	Junko NISHIO
Quelques mots du Président de l'Institut Romain Rolland : Sur l'Institut Romain Rolland a un nouveau statut changement nécessité par la réforme législative	Katsuyoshi Nishinari
Compte - rendu des activités de l'Institut Romain Rolland	
Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland	
Annuaire 2012 des membres et donateurs	
Postface	